
君のいる空

赤星 吏蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のいる空

【Nコード】

N6631N

【作者名】

赤星 吏蛇

【あらすじ】

中学三年生のクラス替えで、小学六年生のとき以来に同じクラスになった大輝と千雲。

千雲は、明るくて、活発で、人気者で、ケンカが強い女の子……だった……。

本当に優しい人はどういう人のこと？

0 話

高校一年生の春。

僕は君と一緒に桜を見ることができなかった。

本当なら、君と肩を並べて正門をくぐり

もしかしたら、君と手をつないだりしていたかもしれない。

君は、成績が良かったから、僕みたいに必死に必死に、勉強しなくても合格していたと思う。

僕は、君と一緒に県内で一番の学校に行きたくて、追いつこうと必死で勉強していた。

君は今、何をしているのかな。
辛い思いをしているのだろうか。

僕、佐山 大輝は。
君、一ノ瀬 千雲が。

あの日の約束を忘れないまま、
この青空の向こうで
君らしく笑ってる事を
思っている。

1話

田園中学の桜は満開・・・。

風がふくたびに、ピンク色の花びらが校庭に舞い降りる。

今日から中学三年生になる俺。

腰より少し下げた、制服のズボンや、二年生のときよりワイシャツのボタンを多く外していることや、通学鞆を片方だけ肩にかけたり。一年生の時は、くだらないと言っていたけど

いざ、上学年になるとやってみたくなるものだ。

今年は、受験が控えていると言っけれど

いまいちまだ実感がわいてこない。

「さあやまつー!!」

- - - - - ドンッ

後ろから走ってきた勢いで背中を叩かれた反動で、大輝は前につんのめった。

「ゲホッ、ケホ、ケホッ

・・・おい、中島あ。

殺す気かよ」

俺の背中を叩いた奴は、

中島 塔夜。出身小学校は違うものの、中学一年生、二年生と同じ

クラス。家も近いから仲がいい。

良い奴なんだけど、

見た目が軽い。軽すぎるだろう!!

ワイシャツの下から、なにやら銀色のチェーンが覗いているし、髪も染めてるだろう。焦げ茶色に染まっている。

それよりなにより、そのズボン!

「下げすぎだろ!」

「そうか?てか、佐山が上げすぎなんだよ」

「いやいや、一応腰パンしてます。これ以上上げるって。いや、脱げるだろ」

俺が言うなり爆笑する中島。

はあ……。こいつ、仮にも始業式があるっていうのに。

「脱げねえよ!

てかさ、クラス替えどうなってるかな?またお前とだったりして!」

妙にニヤニヤしている中島。

怪しい。何か企んでやがるぞこいつ。

「中島。どうせ、女がどうのこうのだろ。妄想すんなよ、変態」

「もー酷いなあ!佐山くん、変態だなんてさ!」

「はいはい。凶星じゃねえかよ」

いったい何を期待しているのだろうか。

多分、中島の頭の中には

受験何ていう言葉は、微塵も入っていないのだろう。

「けどさ、佐山。彼女欲しくないのか?

お前、顔だって普通に良いし。興味無いわけ?」

「別に」

「相変わらずだねえ。まっ！！今年もよろしく頼むぜ！」
「おう」

顔だって普通に良い、なんて。

お前の中の普通は何処だっつーの！！

大輝は、身長が182cmと高く水泳部のため日焼けしている。
一重で切れ長の目。

身長が高いのがコンプレックスだったりする。

ま、クラス替えは気になるけどなあ。

2話

俺は、小学生の頃、ドちびだった。

小学六年生にして、身長

130cm。

水泳は幼稚園から続けていたため、筋肉質で

体重だけは並にあった。

いやぁ。あの頃は、よく女子共にいじられたものだったな。

あの頃は身長を伸ばしたくて毎日2リットルの牛乳を欠かさず飲んでたしなぁ。

中学一年生になってから急激に身長が伸びて、今じゃこの身長。

別に、俺自身はこの身長で満足している。

が、この身長がコンプレックスの理由……。

散々俺を、ちびだの、ネズミだの、小坊主だの言っていじってきた女子がいきなり。

「実は……佐山くんの事が好きです！付き合ってくださいませんか？」

……はい？

ていうか、君は……。

そつ。身長が175cmに達して、クラスで少し目立ち始めた頃、

今までからかわれていた女子から告白されたのだった。

「え・・・と？」

思わず声に出してしまった俺。

いや！どういふことなのかこれは！

告白されたのなんか初めて、しかも相手がええ！？

「う・・・ごめん」

あの時、俺は断った。

告白されたのは嬉しかったけど、ちょっと見た目が変わると、こうなるものなのか。と、思ってしまったからだ。

実際、からかわれていた事も当時の俺は、かなり気にしていたし。

それから、二年生になるまで何回か告白されたが、全部断っていた。関係無い女子も、なんとなくトラウマで付き合うなんて、考えられなかった。

それ以来、この身長と、女子コンプレックスになってしまった。

「だから俺、別にどうでもいいんだよな」

「は？佐山、何か言った？」

「いや。なんでもねえよ」

「そ。じゃあ、俺先行つてるぜ！」

中島が小走りでクラス表に向かって走る。

本当は、それだけが理由じゃなかったりするんだけどな・・・っ

3 話

これも、小学生の頃に遡った話。

俺には、小学校生活六年間、同じクラスでありつづけた奴がいる。

一ノ瀬 千雲という、女子。

俺は、一年生の時隣に座っていた女子が……
余りにでかくて、泣いた。

当時の俺は110cm、隣の女子は138cm。
まあ何と失礼な事をしたもんだ。

入学してすぐに行った遠足も、隣の人と手をつないで歩かなければならなかった。

隣の女子は右肩を下げて歩き、俺はつま先立ちで2km歩いた。

その、隣の女子が、一ノ瀬 千雲だった。

最初の一ヶ月間、一言も口をきかずにいた。
だがある日、工作の時間に作った船を、他の女子に取り上げられ
高いロッカーの上に置いて、からかわれた。

今思えば、結構小学生なんて酷い事を平気でするもんだ。

思いつきり跳ねて、ロッカーの上に手を伸ばす。

「頑張れよお！」

「すげえ跳んでるじゃあん！」

応援するくらいなら、こんなことするなっていうの！！

いくら跳んでも、あと少しの所で届かない。
女子が数人で囲んでキヤーキヤー言ってる。

涙が出てきそうになる。
くそっ……。

「ねえねえ、サエちゃん達！あと少しで、佐山君届いちゃうじゃん」
「あっ！いちい。」

突然出てきた女子一人。

一ノ瀬千雲。

女子からはくいち>と呼ばれているらしい。

「つまないからさ、あたしが、もっと高いところに置いて来る」
えっ！何言ってるの？

この子、背高いんだから

俺が届くはずない！

「えっ、いいの？まあ、いちの好きなようにしちゃいなよ」

「了解！行ってきますー！」

ひょいと、ロッカーの上の船を取り上げて、廊下をずんずん進んでいく。

慌てて追いかけていくと一ノ瀬さんは、家庭科準備室に入っていた。

続いて準備室に入ると、一ノ瀬さんが目の前の机に座っている。

俺の船を持ちながら。

「ねえ」

「なっ、なんだよ！」

「んっ」

俺が作った船を片手で差し出しながら俺を見つめている。

「え？」

「だから。助けてやったの。」

た・・・たす？

「えっと」

状況が理解できていない俺に、一ノ瀬さんは小さい笑顔をつくって

「だから、これ、佐山君のでしょ？」

「うん」

「じゃあ、どうぞ」

俺は、おずおず一ノ瀬さんから船を受け取った。

「佐山君ってさ、なんかよく、いじられてるよね。特に女子」

グサッ

痛いところを簡単に聞いてきた。

「俺・・・ちびだから」

さあ、何とでも言え！笑え！本当の事だけど、本当の事にしたくない事。

こんな大きい子から見れば、俺ってかなり小さく見えてるんだろうな。

無意識に、目線が床に落ちていく。

4話

無意識に目線が落ちていく。

自分で言っておいてなんか、涙が出てきそうになる。

「そう？あたし、お母さんから聞いたんだけど、男子って後から伸びる子多いらしいよ。大丈夫じゃない？」

「え」

半ベソかきながら一ノ瀬さんを見上げる。

机に座っているから、さらにでかくみえる。

「ああも！泣かないの！まだ大丈夫だって。六年生になったらすぐ大きくなってるかもよ？そしたら、あの女子達にちびって言うてやれば？」

「一ノ瀬さんは、俺のこと、ちびって思わないの？」

「思う」

「つて、ええ！？」

「だって、小さいのは仕方ないじゃん。けど、見た目はどうでもいいと思うよ」

俺は以外な言葉に驚く。

ピカピカのランドセルを背負って、小学校に入学してから、ちびだの言われて一番気にしていたのは、見た目だったのに。

「あたしは、すぐく見た目が格好良いのに、性格悪い奴の方が嫌いだな」

「じゃあ・・・見た目が小さくて、格好悪いけど」

その・・・、性格悪くなければいいの？」

初めて喋った女子と、こんな話するなんて。絶対変だ。

誰かが見ていたらどう思うだろうか。

一ノ瀬さんは、口元だけに笑みを浮かべて

「それ、佐山くんのこと？佐山くん、格好悪くないよ。それにさ、友

達だって普通にいるでしょ？大丈夫だよ。そんな気にしなくても。

「……えっ!？」

気づいたら俺は泣いていた。女子の前で泣くなんて、小一の俺、何て恥ずかしいことを……。

一ノ瀬さんも慌てている。

「泣くなよ！ほら。船もあるぞ！」

呼吸を戻しながら、大輝は船を抱きしめていた。

「あり、がとう」

「はいはい、じゃあな」

さつさと、準備室を出ていこうとする一ノ瀬さん。

「待って！」

無意識に呼び止める。

「ん？」

何を言おうとしたんだっけ……。

いや、別に言いたい事なんてもうないはずで。

「一ノ瀬さんの事、<いち>って読んでもいい？」これって、許可を取るべき事なのか。

何でこんな事言ったのか。分からないけど、聞いていた。

一ノ瀬さんは立ち止まってこっちを見ていたけれどまた、ふいっと向き直るとさつきより小さい声で

「いいよ」

「本当？ありがとう！」

素直に嬉しかった。

だめ。って言われたらどうしようか、少し不安だったから。

「けどさ。あたし、名前の方が好きなんだよね。」

佐山くんは、<ちぐ>って呼んでよ？千雲だから<ちぐ>。」

一ノ瀬さんは、廊下に視線を落として言った。

「うん。けど、なんで俺なの？」

「涙、見せてくれたお礼！！」

「っ。うるせえよ！！」

俺は、ちよつと頬が熱くなった気がした。

「ははっ。佐山くんは何て呼べばいいの？」

「一ノ瀬さ・・・ちぐも、名前だから、俺は大輝でいいよ」

「うん。よろしく大輝！」「うん！」

それから六年生までの六年間、毎日のように遊んだり、授業中にふざけて数人で廊下にだされたり、ケンカして殴りあったり。ちぐは、女子なのにはほとんど大輝達男子と遊んでいた。

ちぐは、女子にも人気があったからたまに女子と溜まっていたけれど。

鼻の頭に絆創膏貼っている女子なんて、他にはいなかった。

六年生になっても、身長はあまり伸びず、からかわれたけど、持ち前の運動神経と男友達の多さで跳ね飛ばしていた。

なにより、クラスで人気者のちぐの事をくいちぐじゃなくて、くちぐ>>って呼んでいるのも俺だけで、何となく特別で、嬉しかった。

そして、小学校の卒業式。中学も同じだけれど、同じクラスになるとは限らない。

もしかしたら、もうまともに話さないかもしれない。

卒業アルバムを抱えて、女子に囲まれているちぐを見て、不安になった。

伝えないと。また、ちぐの家で対戦ゲームしようって。今度ケンカするときは、絶対負けないうて。また、秘密基地を作ろうって。クラスがかわっても、ちぐって呼んでもいいかって。

今伝えないと、駄目な気がする。

けど、ちぐの中の自分はそんなに大きい存在では無いかもしれない。中学生になったら、もう俺とは遊びたくないかもしれない。

ちぐだって、女子だから。

これから先は、ちぐも女子と遊んだりしたいのかもしれない。

「大輝い！」

ちぐが走りよってくる。

「なんだよ！」

「なんだよって、ひでえな。それよりさ！・・・」「あのさ、ちぐ。俺、今日は帰るよ。ごめんな。

また、な。」

「え、おい！！！」

背を向けて走り出す。

自分でも、無茶苦茶で、後悔してて、何考えてるのか分からなくて気づいたからこうなっていた。

五年生の時、ちぐに告白してる男子を見て、何となくいらついた。

一ノ瀬と付き合ってるんだろ？って聞かれるたびに、違うと言いながら胸が苦しくなった。

そういう気持ちも全部、目茶苦茶で。

中途半端な別れをした六年生の卒業式。

結局、中学一年生のクラス替えも、俺は三組。

ちぐは二組。

違うクラスだった。

中学生になって、背が伸びたことを、ちぐは知っているのだろうか。そんなことを思いながら、二年生。

俺は一組。ちぐは、七組。

三年生になった今も、心のどこかで、ちぐの事を考えていて。
告白されるたびに、ちぐの事を、思い出せずにはいられなくて。

三年目の田園中の桜。

クラス表に向かって、速度を落しながら
俺は歩いた。

5話

クラス表にたどり着いた俺は、自分の名前を探す。
人がごった返していて、なかなか字が読めない。

「さあやあま！」

――――ドゥンッ

「ゲホッ、またかよ。中島あ。てめ、いい加減にしろよ」

「ごめんごめん！けどさ、俺らまた同じクラスだぜ。三組！すごくね？」

俺、三組なんだ。

中島と同じクラスだし、三年生も普通に過ぎていきそつだ。

「おら、教室行くぞ！」

なかば、引きずられながらその場を後にする。

三年三組

と、書かれたプレートがあるクラスに入る。

「中島、佐山！こつち！」

「おつ、金井つちじゃん！同じクラス？やったね！」

「佐山も来いよ！」

二年生の時同じクラスだった金井が呼んでいる。

金井の席には、初めて見る顔もたくさんあったけれど、軽く自己紹介をしてたむろしていた。

「てか、佐山と中島。また同じクラス？佐山、かわいそうに・・・」

「おう・・・」

「えっ！かわいそうって、おいおい！佐山あ、おう、じゃねえだろ！」

普通に会話も盛り上がる。周りの男子も、会話に参加しはじめて結構良くなれた。

「てかさ、女子の固まりがすごいんだけど」

初めて同じクラスになった田中君が言った。

「マジマジ。全員集まってんじゃん。あの席だれ？」

クラス中の女子が一つの席の周りに集まっている。

ちなみに、俺の席の隣。

窓側、一番後ろ。

真ん中に、誰か一人の女子が座っていて周りに女子が集まって囲んでいる。

「佐山の隣じゃん？隣誰？」

「知らねえ」

「俺知ってるうー！！」

クラスは違かったものの、いわゆるお調子者で有名だった、照岡が言った。

「誰？??」

「なんと！・・・」

「じらすなよ！」

「はいはい。なんと！」

「一ノ瀬千雲です！」

「マジ！？」

「俺、あいつと初めて同じクラスなんだけど」

「有名だよなあ」

「だって、女子なのに野球部でエースピッチャーなんだろ？」

「俺、野球部なんだけど、本当すげえよ。無口だから喋った事無いけど。」

俺が一年の時、先輩に虐められて、体育倉庫連れてかれた時に、一ノ瀬が来て、先輩の顔面殴り飛ばして助けてくれたぜ」

「えっ！？戸崎、そんなことあったのか！？」

「俺も俺も！ゲーセンで恐喝にあった時、背負ってたバットで相手の腹を、ぶっ叩いて警察に連れてってた」

照岡までそんなことを言い出した。

「マジかよ・・・俺らラッキーじゃね？」

「一ノ瀬さ、優しいし可愛いじゃん。」

「けど、俺。同じ小学校だった女子に聞いたんだけど、小学生の時から変わったらしいぜ。」

無口になっちゃったし、それでも、いち最高なの！、とか言うてたけど」「ま、俺らは同じ小学校じゃなかったしな。」

「知らねえけど。俺、狙ってみよっかな」

「無理無理！照岡。お前は無理」

「はあ！？ひでえ」

笑いの渦が起こる。

ちぐと同じクラス？

え、本当……。

いまいち気持ちの整理ができない。

しかも、隣の席。

どうすれば……。

って、俺！何もしないし。ちょっと仲が良かった、その……親、親友と……。

「はい。廊下に並んで下さい」

先生が指示を出す。

男子の固まりと女子の固まりが散って、廊下に並ぶ。もちろん、俺は一番後ろ。

田園中は始業式だけしたら、そのまま帰宅する。

始業式を終わらせて、中島と帰宅する。

「お前さ、たしか一ノ瀬と仲良かったんじゃないの？」

「ん。ああ、まあな」

「何だよ、その反応！」

「別に」

「どんな奴だった？」

「・・・ケンカが強かった。」

「それだけかよ！お前なあ・・・。まっ、そんなこと言って、もしかして」

ニヤニヤしながら俺を見る中島。

「そっ、そんなことねえよ！好きじゃねえし！！」

「あれ？いつ俺が、好きなんて言いました？」

「こんの、中島！」

「春が来た春が来た、佐山くん」

「歌うな！」

「じゃあな、またあした！俺、朝練あるから。佐山一人で行っててくれや」

「はいはい。じゃあな」

中島と別れたあと、一人で家に向かう。

先輩の顔面殴るとか、

ちぐ。ちぐならやるかな。

自然に笑顔になる。

相変わらず、女子に囲まれてて。人気者なんだな。

ん？けど、なんか変わったって言ってた・・・。

何が変わったんだろう。

今までのちぐじゃないのなら、もう俺なんて忘れているかもしれない。

何となく、明日が不安になった。

だけど、早く明日になってほしい。

6話

「ただいま」

まだ、お昼前。

俺の家族も、家にいた。

「あら。早いじゃない」

母が、新聞を片手に玄関にでてきた。

「今日は、始業式だけだから」

そう言つて、俺は自分の部屋に駆け込む。

部屋な扉の鍵を閉めて、ベッドに飛び込む。

はぁ。なんか疲れ・・・

「おかえり」

おい！ここ、俺の部屋。

高二の姉貴が床に、本を積み上げて読んでいる。

「姉貴・・・ここ、俺の部屋なんだけど」

「え。別によくない」

駄目だつて・・・。思春期の弟の部屋に勝手に入るなんて。

「大輝、そういえばクラス替えどうだったの？」

「ちぐと同じクラスだった」

「えっ！本当？千雲と同じなの？よかったね」

「別に」

なぜか俺の姉貴、佐山 里美はちぐと仲がいい。

メールとか、電話を俺の目の前で普通にする。

「本当は嬉しいんでしょ？照れちゃって。顔あかいぞ」

反射的に顔を手で触る。

姉貴、爆笑。

「素直でよろしい！」

こんな姉貴。こんな奴だけど、俺にとって、結構頼りになる姉貴だったりする。

「あのさ、クラス奴が、ちぐが小学生の時から変わったって言うってたんだけど。本当？」

姉貴が急に静かになった。

「千雲は、変わってなんかいないよ。あんたと関わってない間にいろいろあったけど。千雲は変わってない。」

千雲の事、変わったって言うってた子は千雲の面だけ見てたんだよ」「俺の姉貴。たまに、難しい事を言う。」

「いろいろ？」

「それは、あんたが千雲に聞けば？ついでに、里美がよろしく言うてたって言うつといてよ！」

「できたらな」

俺は、ぎゃあぎゃあ騒ぐ姉貴を無理矢理追い出した。

7話

「朝だぁ！！！」

うつ。もう朝？ん？

「おい、姉貴！何で入ってきてんだよ」

「起こしに来たの。早く着替えな。もう七時だよ。」

七時。七時！？

「遅刻！！」

急いで、制服を着て寝癖を直して顔を洗う。

味噌汁と卵かけご飯をかきこんで、家を出る。

「行つてきます」

八時に学校にいればいいのだが、俺のいえから学校までは三十分はかかる。

しかも、今はいつもの道が工事中で回り道をしなければいけないから四十分かかるかもしれない。

小走りで学校へ向かう。

俺は、門をくぐると校庭を横切つて走る。

――――ガラッ

教室のドアを開けて教室に入り、自分の席につく。

今日は野球部は朝練があるため、ちぐは隣にいない。女子もそれぞれ、小さいグループで溜まっている。

「おはよ、佐山」

「ハア、ハア、おはよ」

前に座っている田中が話し掛けてきた。

「走つて来たのか？」

「おう」

「ギリギリじゃん！危ないなあ」

田中は、笑いながらまた、前に向き直る。

「はい、出席取ります」

先生が教室に入ると同時に、後ろのドアから野球部が入ってきた。勿論ちぐも。

無言で俺の隣に座る。

やっぱり、覚えてねえかな。

何となく、胸に穴が空いたような感覚になる。

黒い髪が短く切ってあって、日焼けしている。

今は俺の方が背が高い。

160cmくらいだろう。

二重で、丸い目は小学生の時と変わっていない。

出席を取り終えて、担任が出ていくと、入れ代わりに数学の先生が入ってきた。

何となく授業をまともに受ける気にもならない。

俺は、ぼんやり外を眺めている。

カサッ

ん？何か手に当たった？

俺の机の上に、薄い水色のメモ帳が折り畳まれたものが落ちている。

大輝へ

思わずちぐの方を向く。

前を向きながら、小さく笑っている。

俺は、急いで手紙を開ける。

今日、あたしの家の前の十字公園に放課後きて。

今日の放課後？

俺は、部活は？と書いてちぐの机にメモ帳を置く。

さぼり

そう書いたメモ帳がまた、まわってきた。

分かった

またメモ帳をまわす。

楽しみにしてるよ！

それ、俺も。

ちぐから、こんな事言われたから興奮を抑えるのに苦労する。

早く学校が終わらないか。

一時間がものすごく長く感じられる。

・
・

「佐山、今日部活は？」

中島はダンス部。ジャージから、専用の服に着替えている。

「今日はさぼり」

「お前がさぼり？珍しいなあ」

「たまにはいいだろ。じゃっ、頑張れよ」

俺は、小走りで教室を出ていく。

7 話（後書き）

○登場人物○

佐山 大輝（サヤマ タイキ）
男

A 型

身長・1 8 2 c m

体重・6 6 k g

1 2 月 2 日 生 ま れ

部活・水泳部

中学三年生

佐山 美里（サヤマ ミサト）
女

身長・1 6 5 c m

体重・??? ?

4 月 8 日 生 ま れ

部活・無所属バイト

高校二年生

一ノ瀬 千雲イチノセ チグモ
女

A B 型

身長・1 6 1 c m

体重・4 6 k g

5 月 1 7 日 生 ま れ

部活・野球部

中学三年生

一ノ瀬 イチノセ エソラ 絵空

男

B型

身長・140cm

体重・????

5月2日生まれ

クラブ・少年野球

小学四年生

ナカジマ トウヤ
中島 塔夜

男

A型

身長・173cm

体重・63kg

8月25日生まれ

部活・ダンス部

中学三年生

イガラシ ルア
五十嵐 流唾女

A型

身長・155cm

体重・????

10月18日生まれ

部活・テニス部

中学三年生

エンドウ アヤミ
淵東 綾美

女

O 型

身長・154cm

体重・52kg

誕生日???

部活・野球部マネージャー

高校二年生

マキノ
牧野 忠俊

男

B 型

身長・168cm

体重・???

誕生日???

部活・水泳部

中学三年生

8話

十字公園に行くのなんて、何年ぶりだろう。

砂場が、太めの十字形だから、十字公園。

正式にはまた、別の名前がついている。

十字公園は、ちぐの家のすぐ前で、あまり十字公園の存在を知っている人はいない。

小学生の時は、ちぐの家で、ちぐの弟、絵空とゲームをしたあとに十字公園で遊んだりしていた。

男子数人とちぐで、秘密基地を作った事もあった。

ちぐの家が見えてきた。

黒い屋根の二階建ての一軒家。

ちぐの家の前を通りかかると、絵空がミットを持って、ユニフォームを着て飛び出してきた。

「あっ！さや兄！」

「おっ、絵空。久しぶりだな」

「久しぶりじゃないよ。何年ぶりだよ！また遊んでよー！」

「またな。今から野球か？」

「うん。試合なんだ」

「そうか。頑張れよ」

「さや兄は？」

「お前の姉ちゃんと会ったよ」

「ふうん。付き合ってるの？さや兄とちぐ。」

「こいつ。小学四年生のくせして。」

「違う違う！ちょっと会うだけ」

「さや兄、何焦ってるの？ま、頑張っ」

「そう言い残すと、絵空は行ってしまった。」

「うう。小学生にこんな事言われる俺って・・・。」

気を取り直して、十字公園に入る。
そんなに広い公園でもないけれど、建物の陰になっていて日向がほとんどない。

キイ――――キイ――――

公園の入口から見ても一番右端。
ブランコをこいでいる人影が見えた。

「よお」

影に向かって声をかける。

「よっ、久しぶり」

ちぐは、ジャージのままだった。
俺もちぐの隣のブランコに座る。

「久しぶりだね。ここで会うの」

最初に話し掛けてきたねは、ちぐだった。

「うん。てか、学校でもほとんど会ってないよな」

「二年間、かな」

「そう。二年間」

ブランコの揺れる音が風が、木葉を揺らす音と共に響く。
嬉しさと、何とも言えない寂しさが込み上げてきた。

「大輝」

「ん？」

「卒業式の時、何で逃げたの？」
・・・あ。あの時。

予想外の事を聞かれた俺は、即答できなかった。

理由も、何て説明すればいいのか、言葉が見つからない。

「伝えなきゃ駄目だって思ったけど・・・伝えたら駄目だって思ったから」

「何を？」

ちぐは、俺の方は見ないでブランコを少し揺らしながら聞いている。
「またお前の家でゲームしよう、今度ケンカしたら絶対負けないって、また秘密基地作ろうって・・・これから、ちぐって呼んでいいかって」

頑張った。俺、頑張った。こんな事、もう言えない。

「いいよ」

「へ？」

「また家に来ていいし、秘密基地作ってもいいし、ケンカは知らないけど、ちぐって呼んでほしいから」

今度は、ちゃんと俺の方を見て言った。

姉貴の言っていた通り。

ちぐは、変わっていないと思う。俺の親友のちぐは、ちゃんと目の前にいる。けど、やっぱり何か違うような気がする。

「背、伸びたね」

「伸びたぜ。ちぐ、ぬかした!!」

「ぬかされたあ。もう、これじゃケンカしたいなんて思わないよ」

「とか言って、一年の時先輩の顔面殴ったんだろ？ちぐ。」

「え。何で知ってるの？」「その、ちぐが助けた奴が言ってたんだよ」

「ばれちゃた？」

「ばれちゃた、じゃねえよ！相変わらずだよな！」

何となく、さつきより笑顔になった気がする。

「あのさ・・・」

「なに？」

聞いてもいいのだろうか？今聞いたら、ちぐはまた遠くに行つてしまひそうな気がする。

「俺の友達が言つてたんだけど、ちぐ小学生の時から変わったの？こんな聞き方しかできなかった。

ちぐの表情が笑顔のまま暗くなるのが分かる。

「それ、女子から？」

「ん、まあ」

ちぐは、思いつきりブランコをこいで、高いところから飛び降りた。揺れるブランコを止めて、また座りなおす。

「変わつてない。本当のあたしに戻つた」

「戻つた？」

ちぐも、姉貴と同じで難しい事を言う。

いつに戻つたのだろうか。今までののは、本当のちぐじゃなくて・・・？

「疲れちゃつたんだよね。あたし」

「何が？」

「好きでも無いのに好きって言つて。嫌いな物にすがりつくの。だから、周りに合わせるの止めて、あんまり喋らなくなったの」

「それって、女子特有の何か？」

「ふっ。そうかな。」

大輝はわかんないね」

何となく寂しそうな横顔。ちぐは、やっぱり何かまだあると思う。だけど今は聞かないことにしておこう、と思う。

「大輝の家、今から行つてもいい？里美さんにも会いたいし」

「いいよ！来いよ」

今は、ちぐに笑つていて欲しい。

さつきみたいな、我慢して寂しそうな笑顔は見たくない。

「待ってて！あたし、自転車だしてくる」

家に走って行くちぐの後を、ついていく。

小学生の時使っていた、赤い自転車は絵空の自転車になっていて、今は、銀色の自転車になっている。

「後ろ、のって」

俺が乗ると、ちぐがペダルを踏む。

「ぶはっ！！！」

思わず吹いてしまった。

「進んでねえよ！」

「大輝い、重い」

ペシッ

俺は軽く、ちぐの頭を叩く

「俺の方がでかいんだから当たり前！はい、代わった代わった」

ちぐを、後ろに座らせて、俺はハンドルを握る。

「ちゃんと腰、掴まってるよ」

「ん」

ちぐの手。こんなに小さかったか？

俺の腹にまわされた手は、すっかり日にやけていて小さかった。

ぼふっ

「ち・・・ちぐ！？」

ちぐは、背中にピッタリくっついて、顔を埋めている。

「大輝い」

背中に張り付いているせいだろうか、ちぐの声がこもって聞こえる。

顔が、耳たぶまで赤くなるのが分かった。

だって、こ・・・こんなの・・・。

「ちぐ？」

「大輝い」

名前呼び合ってるんじゃないんだから。

手に、変な汗が滲んでいる。

俺は、ちぐが顔をつけたあたりが濡れたような気がした。
熱くて、ほんの一滴くらいの水。

9 話

「ちぐ……だ、大丈夫か？」

二年ぶりに触れたちぐは、想像以上に小さくて、消えてしまいそうに頼りなくて。

ちぐの体が、俺にぴったりくっついていてから、心臓が高鳴って落ちて着かないのに、震えているように感じる
ちぐの体が、俺の心を不安で一杯にさせている。

「……うん」

頷いているのが、背中から伝わる。

「もう着くぜ。俺の家の場所、覚えてる？」

「うん。たまに、里美さんとも会ってたから」

「え、俺の家着てたの!？」

「うん」

「何だよ……」

ちえ。姉貴、言ってくればいいのに。

「何。拗ねないの」

「別に」

「ほらあ。いいでしょ？今日から遊べるよ？」

「拗ねてない」

「ハハッ!」

声を上げて笑い出した、ちぐ。

「な!!なんだよ!」

「ふっ。大輝、膨れっ面してるのかなあ、と思って。大輝、小学生の時からそうしてたから」

目が熱くなる。

向かい風が頬をかすめる。

何だか、ひどく清々しい気分だ。

「ほら、着いたぞ」

「はい」

ちぐが、降りるとさっきまで

ちぐが触れていた場所がひやりとする。

「お邪魔します！」

10話

「大輝？帰ったの？」

姉貴が階段を下りて来る。

「里美さん、おじゃまします」

「あら！千雲！大輝も一緒？よかったねえ、大輝！」

ニヤニヤして俺を見る姉貴。

ちえ、姉貴が呼んでくれればもつと早く会えたのに。

「大輝の部屋なら片付けといたよ？どうぞ」

当たり前のように言つてのけた。

「おい！何、勝手に入ってるんだよ！？」

「あらあ。見ちゃいけない物なんかあるの？」

「そんなもん、ねえよ」

「千雲。エロいのあったら、姉さんに渡しな。読むから」

「読むの！？」

「読むんですか！？」

俺とちぐが、同時に言う。

思わず顔を見合わせて笑い出してしまった。

「あんたら、息ぴったりじゃない。本当、付き合っ……………！？」

俺は、姉貴の口を塞いでリビングに押し込んだ。

「はあ……………さっ、行こう」

俺の部屋は、二階の一番奥にある。

姉貴は、一階だ。

「ふふっ、うん」

まだ、ちぐは笑いがおさまっていない。

ニコニコしながら俺の後をついてくる。

「適当に座って」

「わあ……………変わったね……………」

ちぐは、口を開けてキョロキョロと、周りを見渡している。
「そりゃ、もう小学生じゃないし」

俺の部屋には、入口から見て右側奥に、ベッドがある。

ベッドの頭の上には、小さい窓があり、ベランダに通じている。
左側奥には、白いデスクがある。

パソコンと本が置いてある。

デスクの左側には、小型テレビとゲームのソフトや本体が置いてある。

テレビに向き合うように、部屋の右側には小さいソファがある。
姉貴のお下がりだった。

ソファーの上の棚には衣類。

薄い水色の壁紙と、紺色の床。

至って普通の部屋だ。

俺は、勉強は嫌いだが読書が好きなため、本はとなりの部屋に全て置いてある。

いわば、俺の図書室化している。

部屋にある本といえば、ゲームの攻略本くらいだ。

「だって、あたしが一番最近に来たときは、あそこにキリンのぬいぐるみがあって・・・」

ソファーがある辺りを手で示して、言う。

「いつの話だよ・・・」

「ん・・・。小三？」

「おい！てか、俺の部屋よりお前の家の方がゲームがあったから、お前の家ばかり行ってただろ？」「そうだけど・・・。やっぱり二年間、長かったかな・・・」

「長、い」

また、寂しそうな笑顔になった、ちぐ。

ちつ、俺といるところなっちゃうんだよな・・・

「あっ！」

急にはっ、として声をいげたちぐ。

「ん？どうした？」

「これ」

デスクの上に飾ってあった木製の写真立てを持ってきてみせた。

「とつといてるんだ、あたしの部屋にもあるよ」

寂しそうな面影が消えた笑顔で、笑いながら写真を見つめるちぐ。

「あ・・・その写真か」

その写真というのは、

小学六年生、最後の運動会で学級対抗リレーで優勝したときの写真だった。

ちぐと、俺が黄色いハチマキをつけて写っている。

当時、俺より背が高かったちぐが、満面の笑みで俺の頭をくしゃくしゃにしている、俺は黄色いバトンを持った手で、やっと届くちぐの肩を組んでいる。

ちぐは、今と変わらず、寝癖で髪の毛がはねている。

この写真を、ちぐも飾っていると思ったら

自然に笑顔になってきた。

「優勝したときのだろ？ちぐの部屋にもあるのか？」

「うん。一番好きな写真だから・・・」

「何で？」

「大輝と二人で写っているの、この写真だけだから」

座りながら、写真を見ているちぐは上目遣いで俺を見上げている。頬を赤く染めながら。

・・・染めながら！？

おい！そんな顔で、み、み、みつ・・・。

思わずちぐを見ていられなくなって、ベッドに視線を移す。耳たぶが熱くなっていくのが分かる。

「大輝・・・」

「な、何だよ」

視線をちぐに戻す勇氣はまだ湧かないから、視線は外したまま答えた。

「背、伸びちゃったね」

「当たり前だろ、成長期バンザイ！」

「あたしの方が大きかったのに」

「残念でした。ちぐ、今どのくらい身長あるの？」「160ちよつとかな？」

「じゃ、俺より20cmは小さい訳だ。随分と変わったな」

「大輝が変わったの」

「あの頃は、ケンカしたら俺、ボコボコだったけど今ならわかんねえよな」

「あたし、まだ勝てる自信あるよ」

「そ・・・そういえばちぐ、先輩を半殺しにし、恐喝野郎を意識不明に・・・」

「尾ヒレ付けすぎ！！正当防衛だから！」

「てか、何でそんな強いわけ？」

「知らない。戦闘系の本の動きを真似して、練習したら・・・？あと、相手の動き見てたら分かるよ？殴らなくても、避けるだけで倒せるし」

「え、どうやって」

「例えばだよ？左右から襲い掛かって来たら、タイミング合わせて足の間から逃げ出せば、お互いに殴り合うし、タイミングが合わなかったら、しゃがんで避けてから、もう一人の靴紐踏むとか」

「そんなこと、普通出来ねえよ・・・」

男でも出来ねえよ、普通。俺は、無理。てか、試す機会が無い。

「ちぐ、そんなに暴れる機会あるのか？」

「ゲームセンターの従業員に知り合いがいるんだよね。そこで、遊んでるふりして不審者がいたら事務所に連れていくバイトしてんの。」

土日に。

正式なバイトじゃないから、五百円くらいしかもらえないけど。

かつあげとか、スリとか、注意してついて来ない時とか、暴れだしたらちよつとね」

ちぐの知り合い・・・。

なんて危険な仕事を女の子に任せてるんだ・・・。

それで照岡が助けられたって言ってたのか。

「あんまり暴力振るいたくないから、最近避けるだけにして自滅させてるけどね・・・」

「そっか」

ちぐの、知り合いとやら。一発あんたの頭を殴ったら正常に動くか？

警備員雇え！！五百円で！

「あつ、大輝。今何時？」「今？七時」

「もう！あたし、そろそろ帰るね。絵空がいるから・・・」

「おう。送ってく」

「え？いいよ」

「いいから・・・」

こんな時間に年頃の女子が一人で帰るなんて、危ないじゃないか。

ま、ちぐなら変質者も撃退できるかも・・・？

いやいや、俺だって男なんだし。

玄関でさよなら、は情けないよな。

「姉貴い。ちよつと、ちぐの家まで行ってくる」

「あつ、千雲帰るの？」

「お邪魔しました」

「いいの！いいの！大輝をよろしくね」

「は・・・はい」

姉貴・・・両目をつむるウイंकはやめてくれ。

「大輝、襲うんじゃないよ」

「何言つてんだよ、エロ婆！」

「ははは。婆とは何よ？あんたがしそんなことを忠告しただけでしょ？」

「送つてく意味ねえだれが、だいたい俺はどっかの姉貴と違って・

・」

「千雲！！またね！」

「さようなら」

こんの、姉貴があ・・・

「はあ・・・」

「本当、仲良しだね。大輝と里美さん」

「そうでございますか。猿と犬が同じ家に住み着いてるようなもので」

「ぷっ。大輝が猿？」

「俺は犬」

「あはは！どつちでも同じだよ」

ちぐは、自分の自転車に乗っている。

俺は、自転車を姉貴が壊したため、スケートボードに乗って並走する。

しばらくすると、ちぐの家が見えてきた。

ん？人影・・・？

ちぐの家の前には、小さい人影が見えた。

「絵空！！！」

「ちぐううう！！」

絵空がちぐに突進する。

「まって、絵空！あたし自転車だから」

ぶつかる寸前で急停止。

絵空の目は涙目で、手には防犯ブザーを持っていた。

「ちぐ！遅いよお。帰ってきたら、お父さんは仕事でお母さんは出張でいないんだもん！」

「ごめんね、絵空。」

ちよつと、さや兄の家に行ってたの」

絵空がちらつと、俺をみた。

「さや兄なら・・・許してやろう・・・」

「おし！！偉い！ご飯は食べた？」

「うん！！！！プリン！」

「それは、おやつでしょ？待っててね、今作るから。それまで、あたしのゲームしてていいから」

ちぐが言うつと、「わあい」と言つて家の中に走り込んで行った。

「ごめんな。遅くなつて」

「大丈夫。また絵空とも、遊んであげて？」

「勿論」

「じゃ、また明日ね」

「またな」

俺は、スケートボードに足を乗せて発進・・・。

「待つて」

ちぐが、呼び止めてきた。

「なんだ？忘れ物？」

「うっん。大輝、携帯持つてる？」

「お、おう」

「交換してくれる・・・？番号と、アドレス」

「いいぜ」

そういえば、俺はちぐの携帯の番号を知らなかった。

小学生時代だから当たり前か。

「赤外線ね」

お互いのケータイの背を近づける。

ちぐの携帯、黒でスライド式。
チューリップ型のビーズが先についている、手作り風のストラップ
がついている。

俺のは、空色で四角い折り畳み式の携帯。
ストラップは無し。

「ありがとう」

「いや、こっちこそ」

「里美さんに、教えてって言ったんだけど、自分で聞きなって言われちゃった」

ありがとう・・・姉貴。

「ふうん。あのさ、そのストラップ・・・」

何となく気になった。

「あ、これ？絵空が誕生日にくれたの。中二の時。」

「絵空とちぐも、仲いいよね」

「絵空は、大人だよ・・・」

「ちゃんと留守番してたもんな」

「うん。じゃあね！あとでメールするよ」

「じゃあ」

スケートボードを蹴り出す。

・・・午後十時。

俺は、ベッドで読書をしていた。

「そろそろ寝るかあ」

部屋の電気を消そうと立ち上がる。

「ピロリッ」

携帯の着信音が鳴った。

「ん？メール？」

パソコンの前に置いてある携帯を開くと、メールが一件来ていた。

件名には、<ちぐ>。

今日はありがとう

今日、十字公園でさ

戻ったっていう話・・・したよね。

けど、大輝の事は二年間忘れてなかったからね。
大輝といるときは、いつも、あたしだからね

「戻ったって・・・」

ああ、ブランコでの。

俺と居るときは、いつもあたし・・・か。

難しいけど、言いたいことは分かる気がした。

何となくだけど、嬉しくて、胸がむずむずした。

俺はすぐに返信した。

おう。

明日な！

ちぐは、やっぱり強い。

戦闘的な強さもあるけれど、他の面でも、強い。

けど、今のちぐは

上手く言い表せないけれど・・・

何かが、変な気がする。

ま、気にすること

ない
か

11話

「おはよう、中島」

「おはよ！」

朝は、中島の家の前で待ち合わせしてから学校に行く事になっている。

「今日怠いよ。どうせ、委員会だの決めるだけだろ？絶対寝る」

「確かに……。けど、俺委員会入るぜ」

「はあ？面倒臭っ。よく出来るよな」

「別にいいだろ」

実は、昨日のちぐとのメールの続きで、ちぐが体育委員をやるって言っていたから、俺もやろうと思った。

「何やるわけ？」

「体育委員かな」

「体育委員？面倒臭。何？委員会での出会いとか期待してるの？」

「んな訳無いだろ。お前じゃ無いんだから」

「じゃ、体育委員会の顧問か！！歳の差？」

「阿呆！顧問は男だ！！」

「出会いがあ、俺も委員会入ろうかな」

「だから、出会いじゃない！」

そんな、たわいもない事を話ながら歩くと、学校に着いた。

何やら校庭が騒がしい。

「なんだ？騒がしいな」

「あれ、一年の集団じゃん。あそこは……。野球部だから、部活見学してるんじゃない？」

「けど、女子もいる」

「ん？確かに、二年もいるな。俺らも見てみるか」

野球部が練習している場所は、校庭を校舎からみて左側半分。

田園中は、野球部が代々強い。

何でも、俺が入った年からは最強なんだそうだ。

見物客が密集している所は、一年と二年、三年と自然に別れている。中島はわざと一年の集団の中に紛れ込む。

「おい、中島」

「いいの、いいの！後輩の意見を聞きたいからな」

ま、放っておけば大丈夫だろう。

俺は少し離れて、校庭を見回す。

ちぐの姿をさがしながら。

「一ノ瀬先輩、すごい・・・」

「今の、フォーク直角？」「130kmのカーブって・・・」

一年の集団からそんな声が聞こえてきた。

一ノ瀬・・・ちぐ？

一年の集団の中に加わって校庭を見ると、キャッチャーに向かって投球するちぐがいた。

キャッチャーが指で何かの指示をだすと、軽く頷き、振りかぶって投げる。

ボールが、ものすごい速さで回転しながらミットにおさまる。

は・・・速。

野球に関しては、素人の俺にはこんな感想しか言えない。

野球部員希望の一年生らしく見える、坊主頭の一年生は尊敬の目線でちぐを見つめている。

一方、一年生の女子生徒は、また別の視線を向けている。

「一ノ瀬先輩、格好良いよね・・・」

「一ノ瀬先輩、何組だろう？」

「格好いいなあ・・・」

顔を赤くして、ちぐを見つめている。

ま、まずい・・・。

一ノ瀬先輩の性別が君達と同じだということを教えなければ・・・。その視線は同性に向けたら駄目だ。

「一年？残念だったねえ。一ノ瀬先輩格好いいのにな」

俺が言うより早く、中島が声をかけている。

軟派しているようにしか見えないが。

「あの、一ノ瀬先輩、彼女いるんですか？」

笑いを抑えるのに、苦労しているのか、中島が手で自分の背中を叩いている。

「彼女はいないけど・・・」

「そうなんですか？よかった・・・」

胸を撫で下ろしながらも、女子の集団の中で視線が激しくぶつかっている。

俺は、遠くで見ているが吹き出してしまった。

「君達、女の子と結婚したいの？」

「へ？」

爆笑。

俺は腹を抱えて笑った。

中島も俺に気づいて、手招きしてきた。

「さっき、こいつが言ったとおり。一ノ瀬先輩は、一ノ瀬 千雲っていう名前で、女だよ」

俺が解りやすく解説を入れる。

「ええええ！？」

絶叫する女子。

はあ、女子っていう生き物はたまに、超音波を出す生き物だ。まったく。

「おい、中島。そろそろ教室戻るぞ」

「ええ？もうちょっと見てこうぜ。はら、一ノ瀬すごいぜ？」

「じゃ、先に行ってる」

俺は、教室に向かって歩き出す。

「え？一ノ瀬先輩って、女だったの？」

「けど、野球・・・」

「けどやっぱり格好いいよ・・・」

一年生の女子の間から声が少し聞こえた。

12話

――ガラッ

教室に入り、自分の席に着くと、田中が既に座っていた。

「おはよ、田中」

「おう。佐山じゃん。あれ？中島は？」

「中島？あいつは、一年生を軟派してるよ」

「はあ？」

田中は吹き出してしまった。

「あの、野球部の周りの集団で軟派してるの？」

田中は、窓の下を見下ろしながら言う。

この席からは、野球部が練習している場所を真上から見ることができる。

「ああ、一年生の子がな、ちぐに惚れちまってな・・・」

「ちぐって、一ノ瀬？惚れるって、一ノ瀬女じゃんかよ」

「いや、本当に。一ノ瀬先輩格好いい！！とか言われてたよ？ご愁傷様だよ・・・ちぐ」

「ははっ。けど、あいつは男子にもモテるからなあ」

そうなのだ。ちぐは、男子にもちゃんとモテている。

まさか、女子だけにモテるなんて事は無い。

短い黒髪。丸い形をしているが、鋭さを感じさせるような瞳。

細身の体は、引き締まっていて日焼けしている。

外見は、特別可愛いという訳では無いが、女子なのに野球部。しかもレギュラー。

ちぐに助けられた経験がある者も多く、時折見せる優しさと、普段はクールだが時々見せる笑顔が最高・・・なのだそうだ。

ま、俺の前では普通に笑うし、たくさん話すけども。

そんな所が人気の種なんだそうだ。

ちぐの事を好きな男子のたいがい、告白が出来ずに怖じけずいて

いる。

勇気ある奴らは、告白して・・・振られているらしい。

「ごめんね」

の、一言で断られると

振られた経験有の奴が言っていた気がする。

「田中も好きなのか？ちぐの事」

「いや。俺は違う」

「へえ？誰だよ。応援してやるからよ」

「そ、そうか？誰にも言うなよ・・・」

「おう！」

「三戸さん・・・」

「みと？誰だそりゃ」

「うおっ！！ひでえな。応援するとか言ってたくせに」

「惚気なら聞いてやるよ。早く告白しろよ」

「頑張ってみるよ・・・」

田中、意外に単純な奴だ。

「てか、佐山こそ！一ノ瀬と両思いなんじゃ・・・」

「違うよ。仲は良いと思うけどな。」

「そうか？じゃあ、俺と一ノ瀬が付き合ったりしたら・・・？無いけどな」

田中と一ノ瀬が？

絶対無い。第一、田中は三戸さんだっけ？好きな人がいるし。

けど、もし・・・。

「嫌だ」

無意識に出た一言だった。

「ほら。両思いかどうかは別として、佐山は一ノ瀬の事好きなんじやねえの？」

「え・・・別に・・・好きとか・・・」

「自分で気付いてないだけだって。お前、鈍感なんだなあ。顔、真っ赤だぜ？」

鈍感・・・？

田中に言われてしまった・・・。

「う！うるさいやい！！」

「ははは」

笑いながら前に向き直る田中。

そろそろ、担任が来る。

くそ。

俺がちぐを？

何を言っんだか、田中め。

そんな訳な・・・

「はい、出席とるぞー」

12話（後書き）

○登場人物○

ミドリカワヒタ

緑川緋汰

男

A B 型

身長・170cm

体重・????

5月27日生まれ

部活・野球部

中学三年生

13話

担任が教室に入ると同時に言う。

「ん？今日は少ないな？野球部は良いとして」

そりゃ、みなさん校庭に御集まりですから。窓の下を見ると、まだ人だかりができたままだ。

きつと、チャイムが鳴った事も気付かずに観ているのだろう。

「なんだ、三分の二はいないじゃないか。野球部は一ノ瀬と、男子が五人だけだろう？他の奴らはどうした？」

「野球観戦をしていますよ」

女子の声が答えた。

「観戦？」

先生が、窓の下を覗き込む。

「はあ……。ちよつと待っててくれ。片付けて来るからな。ちなみに、一時間目は自習だ。

野球部と女子バスケ部は大会の決勝戦と準決勝戦が近いから、一時間目を使うそうだ。

うちのクラスは、女子バスケ部はいないよな？

・・・そういう訳だ。

よろしく頼むぞ」

そう言い残して先生はでていった。

しばらくすると、放送で野球部の野次馬たちは散るように放送された。

野球部の周りの人がいなくなると、野球部は校庭全面を使いはじめた。

また、ベンチに入れなかった者は三年、二年を問わず教室に戻っていった。

野球部は三十人で活動している。

そのうち、十人は三年。

二年が二十人。

今の大会は、季節外れで毎年行われるような大会ではない。

「自習だ自習！さあ、寝よう・・・」

中島が教室に入るなり、叫ぶ。

他の連中もぞろぞろと席に着いた。

自習か・・・。

俺は、引き出しから読みかけな単行本を出して読みはじめた。

14話

ふう……。

やっと校庭全面が使えるな。

一ノ瀬も機嫌が良くないのか、いつものような球は投げて来ないし、これでやっと、本気で練習ができる。

俺は、緑川 緋汰。

野球部長。ポジションはキャッチャー、一ノ瀬とバッテリーを組んでいる。

一ノ瀬とバッテリーを組みはじめたのは一年の後半から。

一年の前半は、一ノ瀬は三年生の先輩と組んでいた。

一ノ瀬自身は、俺の方が良いと言うが、その先輩と何かトラブルがあったようだった。

詳しくは知らないけど。

「一ノ瀬。本気で来いよお」

一ノ瀬は頷いた。

やはり、さっきのは本気で無かった。

まずは、ストレートと真ん中のサイン。

一ノ瀬が、右手で額の汗を拭う。

一ノ瀬は、サインに了解する時は右手。変更を求める時は、左手で汗を拭う仕草をする。

振りかぶって……投げる。

一ノ瀬の全身を使うような投方で、手から滑り出した球は、ものすごい勢いで俺の手の中におさまった。

バッテリーを組んで間もない頃は、尻餅をついたり手の平から血がでたり、まめが潰れたりと大変だった。

うお……

やっぱり今でもすげえや……。

一ノ瀬の球は速いがコントロールが抜群だ。

ど真ん中、低めの内角、外角、高めの内角・・・
カーブ、フォーク、シュート、スライダー・・・
スライダーと高めの外角をつく球は苦手としている。

次、高めの外角ね。

サインを出すと右手を上げる。

振りかぶって、投げる。

ううん・・・微妙だなあ。

もう一回、とサインを出す。

-----バスト

うん。今のならいいかな。

「おおい。一ノ瀬、今の感じで頼むぞ。同じ球をあと少し投げたら俺らは外周するぜ」

「分かった」

大会も近いし、肩を痛めてもらったら困る。

体力重視で行こうと、思う。

-----五十球を投げ終わった。

「おし！終わり！！外周行くぞお！着替えてくるからな、後で部室集合な」

そう言ってから、顧問の

所へ走る。

「先生、俺と一ノ瀬で外周行つて来ます」

「おう。行つてこい」

「ういーす」

俺は、部室に向かう。

部室の中は・・・はつきり言つと汚い。

俺が一年の時は三年のマネージャーがいたけれど引退をして、今はマネージャーはいない。

汚くなるのも仕方がない・・・だろう。

一ノ瀬も一応、女子だが着替えたりもするから、この部室には入らず教員が使う女子更衣室を使っている。

部室に入る事は何度かあるが、特にツツコミを入れてはくれない。一度、「汚いと思わないか？」と聞いたことがあるが、「片付けられないのに」と言われた。

そう言われても片付ける気にはなれない。

- - - - ガチャリ

「お、来たな」

「うん」

一ノ瀬は、黒のＴシャツと紺色のジャージで野球帽子をかぶっている。

ま、俺も同じ格好だが。

「よし行くぞ」

「うん」

校庭に出ると、二年生が

「お疲れっす！！」

と叫ぶ。

野球部は他の部に比べると、上下関係が緩い。

すれ違ったら普通に挨拶をして、呼ぶときは語尾に先輩と付けるだけだ。

今の「お疲れっす」も言いたい奴らが言っているだけで、強制はしていない。

「緋汰、やっぱり高めが駄目？」

走りながら、一ノ瀬から声をかけてきた。

「駄目って訳じゃ無いけど、大事な時は使わないようにする」

「そうか・・・カーブは？大丈夫？」

「お前のカーブは問題ないぜ」

「そう？フフッ」

「なんだよ、満足そうだなあ」

「練習したから」

俺は、隠れて一ノ瀬の事を尊敬している。

恋愛感情とか、そういうのじゃなくて、憧れている。

・・・一ノ瀬のこういう所に・・・。

だけど、逆に妹のように思ってもいる。

「試合でさ、外角のカーブ投げないか？」

「嫌だ」

やっぱり駄目か・・・。

「即答かよ」

「うん」

そう。一ノ瀬は、外角のカーブは絶対に投げない・・・カーブは得意なはずなのに。

「一ノ瀬・・・あの時の事はもう・・・」

「嫌だ」

「・・・そうか、悪かったよ」

「いや、こっちこそごめんね。けど、今はまだ・・・」

「分かったよ。次勝てば、また引退が遠退くからな！勝とうぜ？」

「うん。てかさ、緋汰。引退が遠退いても受験は大丈夫なの？」

「ははは、悲しいこと言うなよ！！」

「か・・・悲しい？」

「一ノ瀬！お前はどうかんだよ・・・」

「多分、大丈夫だと思うよ・・・まだ勉強不足だけど」

「お前、どこ受けるか決めたのか？」

実を言うと、俺はまだ決まっていない。というより、一択に絞った。

「うん。星冠学院」

「星冠！？」

星冠学院。簡単に言うと、目茶苦茶頭いい高校という感じだ。

県内では一番。

「お前・・・そんなに頭良かったのか」

「別に」

はぁ・・・。

俺も真剣に勉強しないと駄目だな・・・。
ん？何気に話題がそれているような？

・・・まあ、いいか。

一ノ瀬が外角のカーブを投げない理由・・・。

俺が知っているのは上辺だけの理屈なのだろう。

深いところは、無理に詮索しないほうがいいと思う。

「一ノ瀬さ、女子で友達いないの？」

新しい話題を提供してみた。

「いないっちゃ、いない。いるっちゃ、いる」

「ふうん？面だけな訳だ」「そんな感じ・・・？みんな嫌いじゃないよ。ただ、特に好きだったりはない。高校生にはいるけどね、女友達」

「高校生か。そういえば、一ノ瀬は佐山と仲良いよな？夜遅く二人でいたとか？噂だけだな、もしかして付き合ったり・・・？」「ば！ばか言え！大輝は、その、え・・・」

お、一ノ瀬のこんな反応は初めてだな。

おろおろとしていて、走る速度が落ちたような気がする。

「なんだ。じゃあただの噂か」

「あつ！その噂は、えと・・・本当に、けど！あの「一ノ瀬は、真っ赤な顔をして、俺を見上げて手振り身振りで説明している。本当、分かりやすい反応だな。」

こういうギャップが男子うけするのかな・・・？

確かに可愛いけど、妹のようにしか・・・。

「プッ」

思わず吹いてしまった。

「な、何だよ！」

「一ノ瀬、佐山の事好きなのな」

ぼっ、という音が聞こえてきそうな勢いで一ノ瀬の顔が赤く染まっ

た。

「な、な、な」

「な？何だよ？」

「うう」

反論できなくなったのか、言葉が見つからないのか、一ノ瀬は俯いてしまった。

やっぱりなあ、見え見えだしなあ。

「一ノ瀬、頑張れよ」

「な、な、な」

「な？」

「むう・・・」

さっきと同じような、やり取りが繰り返された。

「好きじゃない」

「はいはい。頑張れよ」

「うっ・・・」

そんな顔で好きじゃない、なんて言われてもな。

どっちかは、分からないが俺の中では仮定しておこうと思う。

校庭に戻ると、ミーティングが終わり、それぞれに部員が散っている所だった。

一応、部長の話がまだあるので、また着替えたら部室前に集合してから解散だ。

まだ、一時間目なのに・・・腹が減った・・・。

14話（後書き）

この話の中にでてくる、「県内」はこの県と決めている訳ではなく、

学校名・人物・学校制度などはフィクションです。

15話

チャイムが鳴った。

「はああ・・・よく寝たあ」

中島もチャイムの音で目が覚めたようだ。

俺は、読み終わった本を机にしまって校庭に目をむけた。

野球部も練習終わったようだ。

ちぐの姿を無意識に探す。

「あ、いた」

野球部の部室の方からちぐが歩いて来るのが見えた。

ん？隣にいるのは？

ちぐの隣には、ちぐより身長が高くて坊主頭の男子が並んで歩いていた。

ここからだ、顔がよく見えないが何かを話しているのが分かった。

-----ノ瀬の事好きなんじゃねえの？

田中があんなこと言ってたからか？

変に意識してるよな、俺・・・。

べ、別に好きな訳ないはずだから。

その時、ちぐの横を歩いていた男子がちぐの右肩に手を回して引き寄せた。その上肘を触ったり首のあたりを触っているのが見える。

「な！！」

ガタツという音を立てて椅子が倒れた。

「ど、どうしたんだよ佐山」

田中と照岡が驚いて俺を見ている。

「なんでもない・・・」

どうしたんだ俺。

意識しすぎだよ・・・。

それに、あの男子は何してたんだ？

ちぐの彼氏？

いや、そんな事聞いたことないぞ、もし彼氏だとしても俺には関係ない……。

でも……。

落ち着け、落ち着け俺。

●○○●○○●

「おい、一ノ瀬!!」

「ん？ 緋汰、何かある？」

「ちよつとな」

「何？」

「お前、肩痛くないか？」 実は、少し前から俺は気になっていた。投げ方がなんとなくおかしいと思っていた。

球にかかる重みも軽くなった。

案の定、一ノ瀬の表情が強張った。

「大丈夫だよ」

「ちよつと失礼」

俺は、一ノ瀬の右肩を掴んで右手を上を持ち上げる。

「痛っ……」

右手が胸を少し超えたあたりで一ノ瀬が声をあげた。

「ごめん、ごめん。これは？」

今度は肘を曲げる。

「少し痛い」

やっぱりな。

「お前、肩壊しかけてるぜ」

「……」

「いつから痛い？」

「二年生の後半」

「はぁ……黙ってないで教えてくれれば良かったんだよ」

「うん……」

「今日、放課後医者行くぞ。一旦家に帰ったら正門前な」

「ごめん。こんなときに・・・」

「心当たりはないか？」

「・・・練習」

「練習？」

「ごめん。部活終わった後、バッティングセンターで打っては投げ打っては投げ・・・」

「毎日？どのくらい？」

「土日以外。百球、バッティングは五十本」

「こういう奴なんだ。」

一ノ瀬は。

「やっぱり尊敬する、この勝利と努力への素直さに・・・。」

「だけど、無理すんなよ？もう」

「本当ごめん」

一ノ瀬は涙目で俯いてしまった。

「待った！お前は頑張ったんだから良いんだぞ？泣くなよ！？」

「泣いてねえよ」

「そ、そうか！」

ふう・・・。

意外に泣き虫なんだよなあ。危ない危ない。

試合後、顧問に叱られて陰で泣いていたのを目撃してしまったことがある俺。

あの時は焦ったなあ。

クールな女子で有名だったのに、意外だったし。

「ま、今日の放課後頼むぜ」

そう言い残し、一ノ瀬の頭をわしゃわしゃと撫でて、教室に戻った。次の試合、一ノ瀬を出すべきか・・・。

けど、一ノ瀬に勝るピッチャーはうちの部にはいない。

やるからには勝ちたい。

だが、一ノ瀬の肩は？

いやまだ分からない。

医者に行ってから決めよう。

大丈夫だ・・・肩も結構上がっていた。

大丈夫。大丈夫・・・。

16話

「よお、大輝」

「お、お疲れ」

ちぐは、席に着くと水筒の中身を一気に飲んだ。

「大輝は何部だっけ」

ちぐが、ハンドタオルで髪の毛や首を拭きながら聞いてきた。

「俺は水泳部」

「あ、そっか。水泳得意だったよね」

「ああ。一応、優勝したこともあるぜ」

「そうなの！？どんな泳ぎ方で？」

「クロール200m、背泳ぎ100mとか。バタフライとかは優勝できなかった」

「クロール？背泳ぎ？大輝、すごいな。200mもどうやって泳いでるんだよ」

何故か、目を輝かせながら話すちぐ。

「はい。号令」

二時間目の国語の先生が入ってきた。

国語の先生は、ずっと話しているから俺らが話してもばれないだろう。

「あのさ、ちぐ。どうやって、って言われても。」

水泳部なんだから泳げるぜ？普通は」

「けどすごいよ・・・」

異常なほどに褒めちぎるちぐ。

まさか、この話題でこんなにちぐが盛り上がるなんて・・・。

「も、もしかして。ちぐ・・・泳げない？」

「・・・」

まさかな。小学生の時はどうだったか？

水泳の授業で女子の方をじっと見る勇気なんか俺には無かった。

けど、運動神経はものすごく良いはず・・・。

「泳げない」

お！お？お！？

「泳げない？」

「・・・うるさいな。泳げないんだよ！！」

そりゃあ知らなかった。

まさか脅威の身体能力を持つちぐが、泳げなかったなんて。

「ど、どのくらいなら泳げる？」

「クロールで25m」

小学生か！！

中三か！？

「意外・・・」

「いいもんね、浮輪があれば溺れないもん」

「怒るなよ。けど意外だな・・・」

「意外？あたしは野球ができるけど泳げない。大輝は泳げるけど野球はできない。同じだよ」

「いやいや、ちぐは野球以外にもできるだろ。」

足速いし、器械体操系得意だし、球技全般できるし。俺は野球ただだぜ？」「嘘つけ。大輝の方があたしより足速いもん」

「それはそうだとして。俺は水泳だけだな」

「そんなことないよ。超読書家じゃん、大輝。頭いいんじゃない？」

「頭は良くない。そういえば、ちぐはどこ受けるんだ？」

小学生のレベルじゃ、頭良いも悪いも分からないからちぐがどこの高校を受けるのか、まだ知らなかった。

俺はまだ決めていない。

正直焦っている・・・。

「星冠」

「星冠！？」

「こらあ、佐山。うるさいぞ。黙れ」

大きな声を出し過ぎた・・・。

星冠？だつて星冠？

「星冠学院？」

「そう」

「ちぐさ、いつも中間期末、何位？」

「三位以内」

三位以内・・・！？

出来過ぎだ。

出来過ぎだぜ？こんな人間がいていいものか？

「大輝は？」

星冠学院を受けると平然と言つたあとも、前と変わらず聞いてきた。

「秘密！！」

はあ。

高校、ちぐと一緒にの所行きたかつたな。

星冠なんて・・・。

姉貴の高校なんかと比べものにならない。

いや、俺だつて馬鹿じゃないはず。

頑張れば、まだ・・・。

ん？

別にちぐと一緒にの高校じゃなくても！

ちぐと付き合つてゐる訳でもないんだし。

す・・・好き・・・。

「そっぴやさ！！さつき、窓の下にいた奴だれ？二人で来てただろ？」

無理矢理に話題を変える。

けど、なんでこの話題にしたんだ？

「ああ、緋汰の事かな。」

緑川 緋汰。野球部でバッテリー組んでるバッテリー？

じゃあ、その緑川って奴はキャッチャーか。

「へえ」

「何だよ、気になるの？もしかして、そっち系？」

ちぐは、口元に手の平を当てる仕種をした。

「んな訳ねえだろ！！なんか仲良さそうだったから聞いただけ！！」

「仲良さそうだった？」

「ベタベタしてたぜ」

「ああ・・・」

あ、言ったら駄目な事言ってしまった？

もしかして、ちぐは緑川の事を？

「別にベタベタしてない。ちよつといろいろあつたんだ」

「そうか・・・」

ああ、俺！！

何一人で空回りしてるんだあ！

くそお、田中・・・。

覚えてろよ。

その後はたわいもない話だった。

昨日のテレビとか、芸人とか、田中とか照岡が紙を回してきたり。

速い一日が終わっていった。

●○○●○○●●

もう少しか。

一ノ瀬の方が学校より家が遠いからもう少しかかるはずだ。

今日の放課後は一ノ瀬と一緒に接骨医院に行く約束をしてある。

学校の目の前のビルに住んでいる俺は、着替えを済ませてすぐに正門前に来た。

今日は、一ノ瀬とは放課後の部活を休んでいる。

一ノ瀬は、待ち合わせをするときは早めに来るからそろそろ来るだろうと思う。

俺は、七分丈のジーンパンに黒のポロシャツ。
自転車にまたがって、携帯をいじっている。

「ごめん！遅れた！」

お、来た。

一ノ瀬が銀色の自転車に乗って来た。

「一ノ瀬の私服、初めてみた」

長いジーパンに、白地にプリントがしてあるロングTシャツ。

「一ノ瀬ってやっぱり女なんだな」

「ひど！」

「だって、殺気撒き散らしてマウンドに立ってたら女だって忘れるぜ」

「変・・・？」

「分からん」

「可愛いよ。とか言わないと、彼女に嫌われるよ？」

「いや、彼女いないから。おら、行くぜ」

自転車を漕ぎ出す。

並走して一ノ瀬もついてくる。

「肩、大丈夫かな？」

「さあな」

「勇気づけてよ」

「ん。じゃあ大丈夫だよ」

「やっぱりいいや」

一ノ瀬は少し微笑んで自転車の速度を上げた。

< 田園接骨医院 >

て書かれた、看板があるビルの一階に自転車を置いて病院の中に入る。

受付を済ませて待合室で待つ。

患者は俺と一ノ瀬しかまだいない。

すぐに、

「一ノ瀬さん」

と呼ばれた。

「あ、付き添いの方もどうぞ」

看護婦の女性が呼ぶ。

「行こう、緋汰」

診察室一と書かれたプレートがさげられた部屋に入ると、五十歳くらいに見える男性の医者が座っていた。

「一ノ瀬さんかな。今日はどうしたの？」

「投げると肩が痛いんです」

医者がよく分からない言葉でカルテに何かを書き込んでいる。

「一ノ瀬さん、部活は？」「野球です」

「ほお。女の子なのにねえ」

医者も驚きをあらわにしている。

「一ノ瀬は、馴れているのか特に反応を示さない。」

「ポジションは？」

「ピッチャーです」

「ピッチャー？すごいねえ。レギュラー取れるといいね」

「レギュラーです」

「へ？」

目が点状態の医者。

この病院の医者は、実に表情豊かだと思う。

「じゃあ、こちらの男の子は・・・」

「俺は、キャッチャーです。一ノ瀬とバッテリー組んです」

「一ノ瀬も無言で頷く。」

「君達、どこの中学校？」「田園中の三年生です」

「ああ！田園中！じゃあ有名だねえ。女の子のピッチャーがいるって聞いたことあるからね。一ノ瀬さんの事だったのか」

「あ、そうなんですか」

「で、今回は・・・。肩が痛いんだね？」

「はい」

「いつから？」

「二年生の後半です」

「痛かったら言ってね」

医者が、一ノ瀬に肩を上げたり、肘を曲げたりするよう指示を出して一ノ瀬は痛いところで

「痛いです」

と言って動きを止める。

「じゃあ、レントゲン撮るから待合室にいてね。えっと、キャッチャーの子はレントゲン室には入らないで待合室にいてね」

「はい」

待合室に行くと、一ノ瀬はすぐに呼ばれていった。

まだ、部活や仕事の時間なのか患者はお年寄りが少し入ってきただけだった。

一ノ瀬がレントゲン室から出てきた。

「あの先生、レントゲンのカメラに頭ぶつけてたよ。大丈夫かな」

「大丈夫……。だと思う。一応評判良い先生だから」

「うん……。」

思わず笑ってしまう。

一ノ瀬の声を押し殺して笑っている。

「一ノ瀬さん、どうぞ」

さつきと同じ看護婦が診察室に呼んだ。

「はい、レントゲンお疲れ様」

「はい」「骨には異常ないよ。やっぱり筋肉が炎症起こしてるね」

「はい」

「試合とかはない？」

「近くに決勝戦があります」

「そうか……。出来れば投げないで欲しいなあ。サポーターと薬出しとくけど、あんまり投げないでね。決勝戦の前にもう一回きてください」

「分かりました」

「ええと……。キャッチャーの」

「緑川です」

「緑川君、気をつけてあげてくださいね」

「分かりました」

「ありがとうございます」

会計を済まして、病院を出る。

「薬局はあたし一人で行くよ」

「そうか。明日、顧問にも言わないとな」

「うん。・・・ごめんね」

「大丈夫。お前の代わりなんかいくらも・・・いないけどな」

「ごめん」「嘘だよ！嘘！大丈夫。じゃ、またあした」

「うん」

学校の正門前で一ノ瀬と別れた。

17話

「起きろ！」

「ぐおっ」

俺の上にあつたはずの布団が剥がされた。

「姉貴！？」

本当に、勝手に入ってくるなよ・・・。

「朝だよ？今日は朝練があるとか言つてなかった？」「朝練何かある訳・・・あるー！」

時計は六時を指している。朝練は六時四十分からだ。

「姉貴、ありがとう！」

「今日は素直でよろしい。あたしも一緒に出るから、田園中まで一緒に行くこう？」

「分かったよ。着替えるから出て」

「あんたの裸なんか誰も見たく」

「うるさい。さよなら」

姉貴は、中学校の先にある駅に行くのだろう。

姉貴と登校するのも久しぶりだ。

俺は、着替えを済ませてテーブルにのっていたパンと野菜炒めを食べて、水筒を用意して玄関に出る。

「姉貴い、まだか？」

「はいはい、今行くよ」

姉貴は、高校の制服を着ている。

赤をベースとしたチェック柄のミニスカート。

制服を買ったばかりの時は、もう少し丈が長かった。

白いワイシャツに赤いネクタイをつけ、茶色のブレザーを着ている。

「行ってきます！」

「行ってきます」

「はあい。行つてらっしゃい」

俺と姉貴は並んで、中学校までの道を歩く。

「次は引退戦でしょ？優勝できそう？」

「わかんねえ」

「ま、せいぜい頑張りな。千雲は？」

「あいつは、近くに何かの試合があるみたいだぜ？練習してたから」

「へえ、千雲もよくやるよね」

「ああ」

「あんたも負けてられないんじゃないの？」

「当たり前だろ！」

「ふふつ。じゃ、頑張りな！」

姉貴が手をヒラヒラと振りながら俺の先に行く。
そうだ。

中学校生活最後の大会。

最後は勝利で終わらせたい。

そう。最後なんだ・・・。

●○○●○○●

「先生、少しいいですか？」

朝練の途中で、緑川と一ノ瀬が私の所にやって来た。

「かまわないぞ。どうかしたのか？」

緑川と一ノ瀬の表情が暗くなった。

二人とも、三年生で緑川は部長。一ノ瀬はいわゆるエースだ。

私、兎山 サトシが野球部の顧問を始めてから長いが、この二人ほど息が合ったバッテリーはいなかったと思う。

「なんだ。大丈夫か？」

「はい。昨日、緋汰と部活を休ませて頂いたんですけど、接骨医院
に行ってきました」

「接骨医院・・・？」

「肩が痛かったので」

肩・・・。

肩を壊したのか？

「肩か・・・。どうだったんだ？」

「あまり投げるなと言われました」

緑川が口を開く。

「決勝は、駄目か・・・」

「いや、出ますよ」

私の呟きにも近い一言に、一ノ瀬がすぐに返答をした。

「いや、でもな」

「それまでは大人しくしてます」

「一ノ瀬・・・」

「用はこれだけです。ありがとうございました」

一言残して、一ノ瀬は部室にきえていつてしまった。

「俺が試合に出るなって言っても無駄だと思うんです・・・。でも、あいつの体を目茶苦茶にしないよう、気をつけます。

試合までまだ時間があるので・・・ありがとうございました」

部長としての言葉だろうか、バッテリーとしての言葉だろうか、一

ノ瀬の友達としての言葉だろうか・・・。

本当に良い二人だと思う。

「・・・肩・・・か・・・」

恐れていたことだ。

何となく、分かっていたような気もする。

それでも、自分の中の興奮を抑えられなかった。

「あの時・・・私は間違っていた・・・」

●○○●○○●●

三年前の春。

新一年生が入学して少したち、部活選択の時期になった。
毎年、田園中の野球部は強い。

一年生の入部者数は全校一だ。

しかし、夏休み後の部員の数是他の部より少なくなることもししくはなかった。

田園中では、部活選択日の一週間前から部活体験期間が始まる。

気になる部活に足を運び、どの部活に入るかを考慮する期間だ。

部活体験は、毎回別の部活に行っても良い事になっている。

文化部、運動部を問わず、顧問の印鑑を専用の用紙にもらいさえすれば、一日に何回も部活体験に行っても良い事になっている。

だが、野球部に体験にくる生徒は用紙の印鑑が全て、野球部顧問のもので埋まる。

もともと、強豪の中学校の野球部に初心者が入ろうとはなかなか思えない。

少しでも、野球部に馴れていこう。先輩に馴れようと、野球部に入るのが確実な生徒しか体験には来ない。

体験と言っても、キャッチボール程度しかやらせてはもらえないが。

そして、一週間がすぎ部活選択日がくる。

部活を選択した次の日からは自分が選択した部活に行く。

初日は自己紹介をして、終了になる。

三年前、入部したのは三十人だった。

体育着で、校庭に集合した一年生は皆、体験の時に見た顔ばかりだった。

三年生、二年生は練習用ユニフォームを着て集合している。

「野球部の皆さん、こんにちわ」

私は、皆の前に立ち挨拶をした。

「ちわっす!!」

まだ声がいくらか高い一年生の声が少し目立つ挨拶が返ってきた。

「一年生。君達は今日から野球部員になった。厳しい練習だと思っが頑張つてほしい」

「はい!」

「よし。今日は自己紹介を行う。一年生、二年生、三年生の順にするように。名前、クラス、希望ポジション、抱負を言ってくれればいいからな」

「はい!!」

「じゃあ、一組から出席番号順に」

ファースト、ショート・・・様々なポジション希望が出た。

皆、坊主頭で見た目がほとんど変わらず、実力は自己紹介だけでは分からなかった。

「え・・・おい・・・」

「まじ?」

「やば・・・」

自己紹介が一年二組になった時に急にざわつき始めた。
本来なら、

「静かにしろ」

と注意するべき所だが、私はただ驚いて口を開けて起立した生徒を見つめていた。

「一年二組、一ノ瀬 千雲です。ポジションはキャッチャー。全力で取り組みます、お願いします」

意外に低い声だった。

野球部なのに、坊主ではなく短い黒髪。

平らいはずの胸は膨らんでいる・・・。

・・・女子生徒だった。

他の男子生徒と同じ用に自己紹介を終えて座る。

その後も自己紹介が続くが、私は・・・いや、一ノ瀬以外の男子生徒全員は、一ノ瀬の事が気になっていた。

男子ばかりの科学部に女子が一人いる感覚とは違う。女子ばかりの吹奏楽部に男子一人がいる感覚とは違った。

ここは・・・野球部だ。

野球が好きだ。憧れの人がいるから。目立ちたいから。

そんな理由で、言っちゃ悪いが女ができるスポーツではない。しかもピッチャー希望。

今年はずいぶん妙な部員が来たな、と思っていた。

「よし、全員自己紹介終わったな。部員の数が多いから名前を覚えたりするのは大変だと思うが、すぐに馴れるから安心してほしい。三年生、二年生も先輩だからといって、過剰な行動を要求しないように。」

一年生は、先輩を決して見くびらないように。
以上！今日は解散だ。

一ノ瀬は職員室に来るようにな

「さようなら！！」

校庭から、教室に向かったり部室に入ったりと散りはじめたがそれぞれから、同じような会話が聞こえた。

「一ノ瀬って、女子だよなあ？」

「ピッチャーだって。俺もピッチャー希望なんだけど！！」

「大丈夫だよ。どんな奴か知らないけど」

「女子で野球だろ・・・？俺ら同じ部室？」

「馬鹿！！何考えてんだよ！！」

一ノ瀬・・・。

一ノ瀬は私が見るかぎり体験には来ていなかったはず。
職員室で何を聞けるか・・・。

「失礼します。一年二組の一ノ瀬です。児島先生に用で来ました」

放課後、制服に着替えた一ノ瀬が職員室に来た。

「すまないな、呼出しをして」

「いえ」

「いやあ、驚いたよ。女の子で野球部なんてね？今まで聞いたこと無かったからね」

「そうですか」

女子にしては低い声だ。

一言一言が短く、小さいが堂々と聞こえた。

「君、体験はきた？」

「いいえ」

「どこの部活に行ってたんだ？」

「帰宅しました」

「はい？」

「行く部活が無かったので帰宅しました」

「野球・・・は？」

「キャッチボールしに、部活には行く気にならなかったの
で、ずいぶんサバサバした物言いだった。

女の子らしいとは、お世辞にも言えない話し方だ。

「帰宅して、何かしてたのかい？」

「バッティングセンターに行っていました」

「ほお」

「バッティングセンターは行ってはいけませんでしたが？体験は必
ず参加でしたか？そうだったらすみません」

「いやいや！そういう訳じゃないんだよ！」

「はあ・・・」

「・・・単刀直入に言うよ。君、野球経験ある？」「はい」

即答。

「いつから」

「小学一年生からです」

「ずっとピッチャー？」

「はい。けどチームが弱かったので試合はあんまりしませんでした」

「うちの練習は厳しいよ？やっていけるかい」

私が問うと、一ノ瀬は微笑を浮かべて答えた。

「入部するときからこう言われると思ってましたよ」

「・・・」

「明日からお願いします。さようなら」

一ノ瀬は私の問いには答えずに軽く一礼して職員室を後にした。

思ってたより、はつきりとした女の子だった。

小学校からの文書には確かに明るく、活発なリーダーシップある子。

>

みたいなことが書いてあったはずだ。

今の印象からすると、明るいとは受け取れない。

本当はそういう子なのか？今のが本当のあの子なのか・・・。

「明日は土曜日か・・・」

明日は土曜日。

午前練習で、一年生の実力テストを予定している。

全ては明日わかる・・・か・・・。

18話

土曜日の午前練習。

あの日の衝撃は今も覚えている。

あの時、教育者としての理性を失うべきでは無かった。

あの興奮を抑えられなかった・・・。

●○○●○○●

「おはようございます！」野球部員がすでに整列して待っていた。

「おはよう。早速だが、今日のメインは一年生の実力テストだ。それぞれで準備運動しておけ。二年生、三年生はポジションごとに固まれ」

「ういつす!!」

「一年生も希望ポジションごとに固まれ」

「はい!!」

上級生を中心にグループが出来てきた。

「最初はサードから行くぞ。他のグループは、野球部について分からない事などを上級生から聞いておけ」

「ういつす!!」

「サードグループこい」

「はい!!」

サードだけでもかなりの人数いるな。

レギュラー争いが激しくなるなあ・・・。

ノックと送球テストを行うと、やはり上手い奴とそうでもない奴の差が出てきた。

でも、このテストだけでレギュラーが決まる訳ではない。

これから先、特に夏休みの練習を経てレギュラーが決まる。

このテストはあくまで、現時点でどれくらい力があるかを見るだけ

のものだ。

上級生から見ても上手い奴は何人かいた。

サードが終わって、セカンド、センター、ファースト、ショート・・。

次にキャッチャーの番が来た。

今まで、上級生の中ではキャッチャーは一人しかいなかった。

今年のキャッチャー希望は二人。

何故かキャッチャー希望は毎年少ない。

上級生のピッチャーにボールを投げてもらい、捕って送球をしてもらった。

あの頃は、緑川が上手かった。

まだ足りない所もあるが、じっくりと育てれば良い選手になると思っ

た。「よし、ありがとう。次はピッチャー、こっちにこい!!」

最後にピッチャー。

ピッチャー希望は十人。

「先輩のキャッチャーが捕るから、全力で投げてくれ。全部で十球、変化球もありとする!」

「はい!!」

「お願いします!!」

最初の生徒がマウンドに立った。

背が高く、体つきが良い、男子生徒だった。

まずストレートと真ん中。外角、内閣、低め・・。変化球は投げなかった。速さは並、フォームに癖がある感じだった。

「お願いします!!」

二番手は二キビ面で長身の男子生徒。

一発目にカーブ、ストレート、カーブ、ストレート・・。カーブとストレートを交互に投げた。

速さはあるが、コントロールが悪い。カーブも勢いが無い。

「お願いします!!」

三番手は小柄で細身の男子生徒。
ストレートを投げた。

変化球は投げなかったが、コントロールも速さもあった。細身のせいか、球に重みがかかっているようだったが。

・・・その後も、同じように進んでいったが、今までだと三番目に投げた生徒が一番、今の段階で力がある生徒だった。

そして十人目、一ノ瀬の番が来た。

今までの生徒とは違い、一礼するだけの挨拶。

他のポジションも興味津々で一ノ瀬を見つめている。

振りかぶって――――
投げる。

特に変わったフォームではない。服装も、ボールも、グローブも、他の生徒と同じ物・・・。

「なっ・・・!!」

私は思わず声を上げてしまっていた。

一ノ瀬が投げたボールは勢いよく回転しながら今までとは、比べものにならない程・・・いや、上級生よりも速いスピードでキャッチャーのミットに収まった。

「うお!？」

キャッチャーが尻餅をついた。

重みも相当だったのだろう。

周りの反応を全く気にもせずに二投目にかかる。

「ちよつか・・・!？」

二投目はフォークだった。速さはそんなに無かったが角度が・・・。
「直角!？」

上級生の現ピッチャーが声を上げた。

実際は直角ではないが、直角に見えなくもない。
落ち度が半端ではなかった。

一ノ瀬は、表情に微塵の変化も見せず三投目・・・。

内角のストレート。

「い・・・痛え」

キャッチャーのミットからポロリとボールが落ちる。

しかし、先輩として恥ずかしくなったのか顔を赤くしてすぐに一ノ瀬にボールを返した。

四投目はカーブ。

「速い・・・。」

五投目もカーブ。

「ありがとうございました」

一ノ瀬は十球を投げ終わり、礼をしてマウンドをおりた。

一斉に一ノ瀬の周りにできる人ばかり。

「おい、一ノ瀬。お前、本当に女かよ」

「速いなあ・・・コントロールも・・・」

「やばい。伝説じゃん！」一ノ瀬の周りに集まっているのはほとんどが上級生だった。

一年生はただ、呆然と一ノ瀬を見ていたり、小さい声で話している。

・・・あの時なんだ。

あの時・・・緑川と同じように、じっくり育てようと思っていたれば・・・。

興奮を抑えられなかった。一年生で女子、先輩がいるというプレッシャーの中で、冷静にもすごい速さで投げた、目の前の・・・一ノ瀬という・・・一年生の・・・女子を・・・目の当たりにしてしまったから。教師としての・・・理性を・・・置いてきてしまった・・・。

19話

雲一つ見当たらないほど澄み渡った青空。

太陽の光を受けて、不思議な模様が踊るプールの水面。

白い水しぶきが上がる……。

「おい、佐山。遅くないか？」

「うわぁ……」

こんないい日なのに、朝っぱらからこいつかよ。

「四十分からだろ？ちよつと四十だぜ？」

「お前、先輩だからって調子乗るなよ。五分前にはいるだろ？普通は」

いや、俺は一年のときから時間きつかりに来てましたんで、はい。

「じゃ、時間だからな。練習始めようぜ？」

「……けつ」

けつ、て。

聞こえてますから！

何でこいつはいつもこうなのか……俺、何かしたかよ？

三年生、水泳部の牧野。

こいつとはどうも気が合わない。

俺は何もしてないぜ？

牧野がいつも一方的に絡んでくる。

「先輩。少しいいですか？」

「ほ？なんだ？」

男子部員の二年生が話し掛けてきた。

「あの、ストップウォッチを借りたいんですけど……」

「別にいいぜ。教官室にあるから」

「ありがとうございます！！」

二年生……もう少して楽園が待ってるからな……。

本当に、三年生が消えれば部活は楽園状態だ。

一年生は辛くなるけど。

ま、樂園をくれてやる前に俺は結果を残したい。
やたらに絡んでくる牧野の事は忘れよう。

さようなら、牧野。

「一コース借りるぞ!!」

「了解!」

一コースで泳いでいた女子部員が隣に移った。

俺は、冷たい水の中に滑り込む。

クロールで500m泳ぐつもりで。

――水は俺の味方だ。。。

本気でそう思う。

歩くより、泳ぐ方が気持ちが良いし辛くても、水泳は楽しいから続けられる。

水の中では、自由になれる気がする。

水泳の神様みたいなのがもしいたら、俺だけに恩恵を授けてくれているようだ。

水をかいて、ぐんぐん前に進む。壁にぶつかったら、クルリと滑らかにターンをして、また泳ぎだす。

もつと。。。もつと速く。。。

隣のコースに自分の競争相手がいるとイメージすると、スピードがどんどん上がる。

だんだん、腕や足が痛くなって、息が苦しくなってきた。

そういうときは、何も考えずに自分の内の闘争心を掻き立てて、水の冷たさを感じて、力を沸き立たせる。

「ぶはあっ!」

500mを泳ぎ切って、次の平泳ぎにかかる。

朝練ギリギリまでずっと平泳ぎをしてるつもりだ。

今日は早めに上がりたいからな。

「――先、上がらせてもらっぜー!!」

「はいよお」

三年生の部員が軽く答えてくれる。

水から上がったばかりで、まだプールの臭いが少ししていて、重い体を教室へと向かわせる。

三年生の教室が遠く感じる・・・。

こういうとき、階段は最悪だ。

うう・・・あと一歩お・・・。

「佐山君!!おはよお」

俺の重い肩に、手が置かれた。

さらに・・・重い。

「ああ?五十嵐か。はよ」元気だなあ、おい。

ぴよこぴよこ跳ね回りながら満面の笑みで挨拶してきた。

五十嵐流唾。

確か、二年生のとき同じクラスだったか?

肩よりすこし長い黒髪。

先が少しカールしていて、前髪はセンター分け。

目が大きくて、くつきりしている。

小柄な体型でそれぞれのパーツが形が良い。

人気の女子の上位の奴だ。

ちぐとは、真逆の容姿。

「朝練!?!お疲れ様!!」

「おう・・・ども」

できればその手を離していただきたい・・・。

「そういえばさ、佐山!新しいCD聴きたいって言ってたよね?お

兄ちゃんから借りたから、放課後うち来て?」

CD?

そんな事言っただけかなあ。

「ああ、ごめん。今日の放課後は予定あるから。またな」

今日はちぐの家に行く。

目的は絵空と遊ぶ約束をしたからだけど。

ちぐも居るはず。

「なあに？彼女？？」

一段下がって、上目遣いに俺を見上げながら話し掛ける五十嵐。せつかく、階段のぼったのに・・・何で降りたのかな？

落とし物？「彼女はいないから。ちよつと友達と約束してんの」

「ふうん？あの、一ノ瀬とかいう子？」

「えっ、お前よくわかるな。正確にはちぐの弟だけど」

「二人が仲良いつて噂・・・本当だったんだ」

噂・・・になつてゐるのか。

「ああ、噂になつてゐるんだ？」

CDはまた今度頼むよ。ありがとな」

「ばいばあい！」

教室の前で別れるときに、手をふっている。

五十嵐もよく絡んでくるんだよなあ。

牧野とは違うけど・・・教室のドアを開けて入ると、田中や小島はまだ来ていなかった。

ちらほらと文化部の男子と朝練無しの女子の姿が見えるだけだ。

「佐山・・・」

「ん？」

俺は、いつものように席について鞆から教科書を取り出していたところ、男子生徒に声をかけられた。

ううん・・・。

誰だったかな・・・。

少し大柄な体型で丸っこい顔つき。

身長もさほど高くはない、おっとりとした感じの男子生徒だった。

「ええと、佐藤くん？」

「佐藤？僕？」

「ハズレか」

「ハズレって、酷いなあ。」

「じゃあ、渡辺？」

「もういいよ！僕は、菊地 登也だよ。覚えてね」

「あ、うん。悪かったよ。俺は、佐山大輝」

「佐山は知ってるよ」

「ああ、そう。登也って・・・小島と同じ名前だな」

「そうだね！漢字は違うけど」

ふつくらとした頬に浮かべた笑窪が人が良さそうなイメージとピツタリな笑顔を、菊地はする。

「で、どうしたんだよ」

「あつ、ごめん。僕から話し掛けたのにね。あのさ・・・」

菊地の顔がみるみる赤く染まる。

「お前、わかりやすい」

「え！？そうかな、えっとけど・・・」

「何？お前、五十嵐が好きなの？」

菊地の顔が、ボツ、という音をたてそうな勢いで顔が真っ赤になった。

「凶星かあ・・・で、さっき俺が話してたから嫉妬しちゃ」

「違うよ！」

あれ、違う？

「なんだ」

「五十嵐さんは、可愛いと思うしモテるけど僕は無理だよ・・・」

「よくそんな恥ずかしい台詞を」

「ま、五十嵐じゃなくて！あの・・・五十嵐さんの友達に、佐藤さんっていう人がいて」

「お、ここで出てくるのか佐藤は」

「・・・」

「で、佐藤さんが？」

「僕、佐藤の事が幼稚園のときから好きなんだけど」

「ストーカー・・・」

「酷っ！別に追いかけて回したりしてないんだからストーカーじゃないだろ」

「ごめんごめん。続きをどうぞ」

「うん・・・けどね、今まで何の接点も無かったし、僕こんなんだろ？だからずっと告白できなかったんだ。」

けど、もう中学三年生でも同じクラスになれなくて・・・。

だから、告白しようと思うんだ！

佐山、五十嵐さんと仲が良いんだろ？

ちよっと、佐藤さんの事聞いてみてくれない？」

菊地・・・健気な奴め。

俺、こういう奴嫌いじゃない。

「そうかそうか！けど俺、五十嵐とはあんまり仲良くないかも」

「えっ？あんなに仲良さそうだったのに」

「嫌いじゃないけどな、何て言うか、あいつから一方的に仲良くしてくる感じかな」

「贅沢だよな、佐山」

「ま、聞いとくよ」

「ありがとう！」

菊地は初対面なんだけど、危ない感じがしない。仲良くしていけそうだ。

「佐山は、一ノ瀬さんが好きなんだろ？」

僕、一ノ瀬さんと話したこと無いんだけど、お似合いだと思うよ。五十嵐さんより人気だよな。頑張って！」

「おいおい。誰が一ノ瀬の事好きなんて言った！」「え？ちがった？」

「いや、あの、好きじゃなく・・・ない・・・けど、あの」

「佐山くん、頑張って」

「うっ・・・」

どいつもこいつも、何なんだよ。

「そっいゃ、その娘の下の名前は？」

「うんとね、佐藤 羽奈さん」

「はな？」

「はねって書いて、奈良県の奈」

「了解」俺が答えると、鼻歌まじりに自分の席に戻っていった。

19話（後書き）

最近、今までの話の中で誤字や矛盾を発見してしまいました・・・
じかんを見て訂正したいと思います。

間違いに気付いてくれた方は、教えて頂けると幸いです。

20話

「礼！さようなら」

今日も大した問題もなく終わってくれたなあ。

午後は部活でまた牧野に会わなくちゃいけないけど。

「佐山！今日さ、俺部活無いんだけどさゲームしねえ？」

中島が、廊下を歩いているときにこえをかけてきた。

「俺今日は部活・・・」

「牧野が今日は無いって言ってたぜ？」

「あれ？無いの？」

「牧野が言ってるんだし、そうなんじゃね」

まあ、牧野が言うならなそうなんだろうな。

「あ、けど今日他の奴と遊ぶ約束してる」

「ええ？そんなあ」

中島が派手に落ち込んで見せる。中島とも遊びたいけど、絵空との約束は破りたくないし・・・それに、ちぐもいるはずだから。

「いや！ちぐは別にいいよな！」

「は？何？」

廊下でいきなり大声をあげた俺に、まわりからの白い目線と中島の恥ずかしそうな顔が刺さる。

「いや、何でもねえ」

「何だよ。狂ったかと思っただぜ」

「う、うるせえ！！」

「佐山、本当に大丈夫か？給食は問題無かったぞ」

「う、うるせえ！」

「医者を呼ばないといけな」

「ああ、もう！本当に大丈夫だから」

中島と顔を見合わせて爆笑する。

「本当は今日ちぐの家で絵空と」

「絵空？」

「あ、ごめん。ちぐの家で、ちぐの弟の絵空君とゲームする約束してたんだけど、中島もちぐの家来る？」

「え？ちぐって、一ノ瀬だよな。弟いたのかよ」

小島と居るときは、＜一ノ瀬＞ではなくて＜ちぐ＞と言って話しているから、＜ちぐ＞で通じる。

「ああ、小四くらいだったような」

「へえ？お前と一ノ瀬って結構深い仲なんだ」

「ま、まあ」

「俺も行つて良いわけ？」「さあ？」

「おい・・・俺なんかが一ノ瀬の家に・・・」

「は？」

「いや、冗談。本当に行つていいのかよ」

「うん」

「言つたね、言つたな。俺には何の責任もねえぞ、言つたからな」

「何の責任だよ」

「まあいいじゃないか！で、何時から何時まで？」

「じゃ、五時に俺の家に来いよ。八時くらいまで俺は居るけど」「

八時！？おまえらどんな関係？」

「何を想像してる」

「ごめんごめん」

「八時までは無理か」

「いや、俺は佐山んち行つて言えば平気だけどさ。俺、一ノ瀬と話したことすらないんですけどいいのかな・・・」

「さあ？」

「あ、そこはうんじゃないんだ」

「言つとくけど、一ノ瀬の家を他の女子と同じような感じと思うなよ。」

俺も二年ぶりだけど・・・間違っても五十嵐みたいな部屋じゃない」
「ああ五十嵐？けど、普通に女子の部屋じゃね。

なんつか・・・やっぱり女子の部屋って緊張するよな！！

俺、結構女子んち行っただことある方だと思っけどな」

「その緊張。多分ないから安心しとけ」

「は？」

ま、行ってみれば小島とちぐ結構気が合うかもな・・・。

「言っとくけど、ちぐの弟とゲームする約束してたほうが先だったんだから、お前も了解しとけよ？やるゲームとかも絵空優先だから」
「どんなゲーム？」

「戦闘系。てか、それくらいしかない」

「やつほーい！！」

万歳をして、派手に小島が喜ぶ。

「じゃあ、早めに来いよな！」

小島の家の前で別れるときに一声かけてから、走って家に帰る。

二年ぶりのちぐの家。

不思議と、緊張する。

二年ぶりだから？

今までこんなことはなかった。

それに、今日は絵空に用があるんだから・・・。

全力疾走して、顔に当たる爽やかな風が下腹がうずくような感覚を吹き飛ばしてくれるようお願いながら、微笑んだ。

●○○●○○●●

着替える服を選ぶのが面倒で、ジャージに着替えて黒にライトブル
ーの線が入っている鞆に

スポーツ飲料のペットボトルと自転車の鍵、みんなで食べる予定のチューインガムを入れて家を飛び出す。

自転車にまたがって、道路に出るとちょうど小島が来た。

「おっ！ちようどじゃん。いこうぜ！」

何で中島、乗り気？

「おう」

自転車を漕ぎ出す。

中島と並走しながらちぐの家を目指す。

「てか佐山ジャージ？」

「うん」

中島は赤いチェック柄のシャツの下に白いＴシャツ。

黒っぽいロールアップジーンズにスニーカー。

俺も私服の方が良かったかな。

「別にいいけどなあ」

「おう」

たわいもない話を話しながら、漕ぎ進めるとあっという間にちぐの家についた。

「ここ」

「意外に近いんだな・・・」ちぐの家を見上げながら中島が呟く。
自転車を止めてインターホンを押す。

「待ってたよ！さや兄！」

「おっす！」

「？」

勢いよく飛び出してきた絵空が、中島を見て首を傾げる。

中島は固まっている。

「あのさ、絵空。この人俺の友達なんだ。こいつも一緒に遊んじゃだめか？」

「中島塔夜です！絵空君、よろしく」

「よ、よろしく・・・」

「絵空が好きなゲーム、中島得意なんだぜ。一緒にやろうぜ?」

「さや兄の友達なら、いいよ」

「よし! いい奴だな絵空」中島が満面の笑みで、絵空の頭を撫でる。
「へへっ」

絵空も悪い気はしないようだ。

「じゃ、二階きてね!」

絵空はそう言い残して二階に消えた。

「ああ、良かった・・・拒否されたらどうすればいいか考えてたんだよな、俺・・・」

「良かったな! じゃ、いこうぜ」

二階に上がる階段の先に部屋が二つあった。

奥には、ドアに<絵空>のプレート。

手前には<千雲>のプレート。

絵空は<千雲>プレートの部屋に躊躇なくはいっていった。

そういえば、この姉弟も勝手にお互いの部屋に出入りしてるな・・・。

「ちょっとたんま!」

中島がドアノブに手をかけた俺を止めた。

「なに?」

「いま、一ノ瀬いないよな? 部活で!

勝手に入ったらまずいだろ!」?

「いいんじゃない?」

「へ?」

「この家のゲーム類、全部ちぐの部屋にあるし」

「へえ・・・て!」

「大丈夫だから、ちぐが帰ってきたら説明すればよくね?」

「うん・・・」

ドアノブをひねって部屋に入ると、絵空が携帯型ゲーム機を三台床に並べて、ソフトを選んでいた。

ちぐの部屋は、一ノ瀬家でリビングを除いて一番広い。

奥に勉強机と野球の道具と松井やイチロー、阪神タイガースのポスターが壁中、天井にも張り巡らしてある。

入口から見て右側にベッドと本棚。

本棚の中身は漫画と参考書のみ。

漫画は少年漫画が三種類、物凄い巻数で並んでいる。

参考書の数は、さらに漫画を上回る。

左側には大型の薄型テレビと携帯型ゲーム機と、テレビに接続するタイプのゲームがビデオデッキにならんでいる。

絵空の分もならんでいるため、すごい数になっている。

本棚の上には、あの写真がある。

リレーで優勝した時の写真……。

「うおお！すげえ！！」

中島が部屋に入ってなり食いついたのは、本棚。

「この漫画、全部お姉ちゃんのか？」

興奮した様子で、中島が絵空に問い掛けた。

「あ、うん。僕も読むけどね」

「そうなんだ！全巻そろってるんだな！

俺も、めっちゃ好きなんだけど小遣い足りなくてまだ二十巻しか持つてなくてよ……」

中島が好きだという漫画は完結していて、全部で七十八巻。

俺は、中島が好きな漫画をちぐが全巻持っている事を知っていた。だから、気が合うかもなあと思っていた。

キラキラと輝く目で漫画の山を見つめる中島を、絵空が見つめている。

「絵空、早くゲームやりたいもんな」

「うん！さや兄は赤ね」

俺は赤色のゲーム機を手にとる。

「僕は、黄色！」

「んじゃ、俺は緑だな」

絵空の視線に気づいたのか、中島もやってきた。

絵空が選んだのは、中島が持っているゲーム。

俺は、ちぐのソフトを借りた。

「てか、一ノ瀬ん家何台ゲームあるんだよ」

「さあ？」

「さあ？」

俺が答えると、絵空も俺のマネをして笑う。

こういうとき、弟が欲しいと本気で思う。

くさや兄>と絵空に呼ばれる度に何となく、くすぐったいような暖かい気持ちになる。

「まじもつ一ノ瀬ん家最高。俺、今日から絵空の部屋に住む」

「そう？僕ね部屋狭いけどいい？」

「余裕！絵空と一緒に寝てやるよ」

「蹴り飛ばしてやる」

「おつ、上等だあ！！」

中島がそう叫んで俺のキャラクターに強烈な一撃を喰らわせた。

「おい、中島！！この野郎！絵空ものらないの！」

「なかなか乗りがいいぞ、絵空。少なくともこいつより上」

「そう？さや兄は鈍いんだねえ」

「鈍くない！乗りが悪くて悪かったな・・・ああ！？」

絵空のキャラクターが持つ剣でザックリやられて、俺のキャラクターはやられてしまった。

「いえい！」

「うう・・・」

絵空と中島がハイタッチする。

チエッ。

・・・それから、六時半位までソフトを取り替えながら三人で遊んだ。

「いけっ！佐山！！」

「了解!!」

テレビの画面の中の俺がでかい怪物に向けて、青い光線を発射する。怪物が倒れた。

画面いっぱいに現れた<クエストクリア>の文字。

「ええい」

三人でガッツポーズ。

「俺様の指揮は最強だな。佐山よ、よくやった」

「なんか悔しい・・・」

「本当にヨル兄は強いんだね。何で攻略本に載ってない裏技知ってるの?」「ヨル兄・・・?」

中島がキョトンとした顔で絵空を見つめた。

「中島君の名前、塔夜でしょ?夜っていう字があるからヨル兄!!」

「ヨル兄か・・・ヨル兄ね・・・なんか、照れるし!」

中島は無造作に頭を掻きながらも、嬉しそうに笑っている。

「さや兄とヨル兄。仲良しなんだね!

さや兄酷いんだよ?二年も僕と遊んでくれなかったし・・・

けど、ヨル兄も来てくれたからさや兄も許すんだあ」

「そうかそうか!絵空、いい奴だぜ。かわいい奴め!」

中島と絵空も仲良くなったし、良かった・・・。

絵空が怒ったらどうしようかと思った・・・。

「じゃ、次行くぜ次」

ゲームのコントローラーを、中島が握りなおした。

-----ガチャ

「おかえり、姉貴」

「ただいま・・・あれ?いらっしやい」

ちぐが、帰ってきた。

緑色のＴシャツと黒のジャージ姿のちぐの髪は濡れていてシャンプーの香りがした。

「ちっす」

「絵空、大輝と遊ぶ約束してたんだね」

「うん！あとね、ヨル兄も来た！」

ちぐの目線が中島に向く。

「えっと、中島君でいいんだよね？」

中島の背筋がぴーんと伸びた。

「はい！おじゃましてます！えっと、佐山の友達であの・・・」

「いいよ、絵空の相手してくれてありがとう」

ちぐは、慌てている中島に向けて微笑んで言った。

「いや！こつちも楽しいんで大丈夫です」

あれ？何故中島は微妙に敬語なんだ？

「おら、ちぐもやるんだろ？」

コントローラーを差し出すと、待ってましたとばかりに笑いながらコントローラーをうけとった。

「もち。いま何クエスト目？」

「三十」

中島が画面に顔を向けて答えた。

この二人、ゲームに向かうとすごい真剣な顔するんだよな。

「三十？中島君やるね」

「ふっ、俺結構強いっすよ？」

「ヨル兄、姉貴を舐めたら駄目だよ」

「ははは！絵空、心配するなよ？俺が一発でぶったおしてやるからな！」

「おいおい、一応協力プレイだからな？」

あと絵空、いつから姉貴って読んでんだ？」

「忘れた。さや兄のマネしてみた！」

「そっか。・・・おお！？」

本日二回目。

いつの間にかクエストが始まっていて、三人に置いてかれていた。

「キタアツ！俺三十一きたの初めてだし」

「あれ？ヨル兄初めて？」

「え？だつて」

「姉貴、全部クリアしてるからさ。見慣れてるんだよね、僕。見てるんだけど」

「全クリ！？」

画面にこれまたバカでかい怪物が現れた。

現れたなり、赤い光線を次々に発射している。

ちぐ以外のキャラクターには全員当たった。

一撃でライフが半分削られた。

ちぐの指がコントローラーの上を走り、光線を簡単にすり抜ける。

中島のキャラクターが大刀を構えて怪物に切り掛かった。

連続して切り掛かると、怪物のライフも減っていく。

怪物が怯んでいるうちに、絵空のキャラクターが時間をかけて魔法を発動するための用意をして、発動させる。

大ダメージを与えた。

魔法の衝撃でしばらくの間は、光線を発射できなくなった怪物に俺が攻撃力を上げた拳をたたき付ける。

怪物のライフが残り僅かになった。

「よっしゃ！！」

佐山も俺も絵空もテンションが上がっている。

ちぐは、さつきからコントローラーの上に指先を走らせてちぐのキャラクターの足元に黄緑色の魔法陣を展開している。

その魔法陣がオレンジ色に変わったとほぼ同時に、怪物のライフが回復して特大の光線を発射した。

ちぐを含めて全員に攻撃が当たり、ライフが一気にゼロになってしまった。

「はあ！？今のありかよ！」佐山があぐらをかいた状態で膝を揺す

って言った。

「まだ続くよ。佐山君」

ちぐが言うと、みるみるうちにライフが回復していった。
全員がライフの半分を回復した。

「え？」

佐山は驚きながらも、ちぐの指先の動きに見とれている。

どうやらさっきの魔法陣がライフを回復させる魔法だったようだ。

素早く俺は右足に攻撃力を集中させて怪物に走り寄り、飛び蹴りをくらわした。

左側によるめいた怪物の下に、絵空が魔法陣を展開させて一気に爆発させる。

すかさず、中島が日本刀の様な形をした刀を三本。右手と左手、口に加えて走りだし怪物に突き刺した。

怪物のライフがまた僅かになると、さっきのようにまたライフが回復しはじめた。

ライフが回復しきるまえに、ちぐのキャラクターが怪物の下に潜り込んで拳を連打する。

延々とヒット数が嵩む。

怪物のライフの回復も止まり、ライフがどんどん減っていく。

ちぐは、連打をやめて肩に大きいバズー力を構えて下から押し上げるようにして打ち放った。

怪物が宙を舞い、崩れ落ちる。

画面いっぱいにくエストクリアの文字が現れた。

「やりい！！」

俺とちぐハイタッチを交わした。

ちぐがするゲームはいつ見ても痛快だ。

「ちえ。姉貴、あの魔法陣教えてくれよお」

「やだ」

「うわぁ！」

こんな絵空とちぐのやり取りを、キラキラと輝く目で見つめてるのは・・・

「中島・・・」

中島が爆発した・・・。

「佐山！一ノ瀬さん借りるぜ！」

言うなり一ノ瀬と向き合う形で座った。

「凄いなあ！！あの魔法陣、組むの目茶苦茶速かったし！

全員分の回復つてあんな早くできるものなんだったんスね！！

まじ強え！！」「ああそうかな？ありがとね。あと一ノ瀬さんってさん付けしなくてもいいよ？」

「まじ？んじゃ、<いち>って呼ぶわ！俺も中島でいいからな」

「よろしく」

「あと、この漫画・・・全部いちの？」

中島の野郎、早速<いち>って呼んでやがるし。

「うん。好きなの？」

「超好き。けど小遣いなくて読めねえ」

「そっかあ、貸そうか」

「やりい！！いち！まじありがとう！」

「ういー」

中島は嬉々として漫画を鞆に詰め込んでいる。

「なあ、ちぐ」

「ん？」

「今日八時までいていいか？」

「ああいいよ」

「よっしゃ」

「あ、絵空。あんたはそろそろ上がりな。母さんが呼んでる」

「分かった。ヨル兄、さや兄ありがとう！また遊ぼうね」

「おう！」

「じゃあな、絵空！..」

絵空がいなくなると、少し空間がさみしくなった感じがした。

「いち、佐山、このソフトやんねえ？」

中島が持ち出したのは最近発売されたばかりの新しいソフト。
俺は持っていない。

「あつ！そのソフト、よく買えたね。予約も厳しかったでしょ」

「まあな、楽勝だぜ」

「どっちだよ。」

俺はそれ持っていないから二人の見てるぜ？」

「大輝ごめんね。あたしもこのソフト一つしか持っていないから・・・」

「

「気にすんなつて。見てるのも楽しいから大丈夫だから！」

申し訳なさそうな顔になったちぐに笑いかけると、ちぐも笑顔になった。
った。

「もしかして、俺は邪魔かな？」

「うるせえ！さつさとやれよ」

三人でベッドに背を付けて並んだ。

ちぐ、俺、中島の順で。

ゲームが始まると、携帯型ゲーム機の画面の中には対峙する、男女のキャラクター。

「その額当て！レア物じゃね！？」

佐山がちぐのキャラクターを見て声をだした。

「まあそんな感じ」

ちぐはいたって冷静。

「俺もすんげえの持ってるツスよ」

そう言つて、画面内の中島のキャラクターが手に取つたのは複雑な模様の黒い短剣。

「それもレア物じゃん。あたし持ってるないや」

「へへん。行くぜえ！」

二人が取っ組み合う。

中島もゲームは強い。ちぐも強い。

一進一退のゲームが続いた。

「……ああ！」

中島が声を上げたのに驚いて、中島の画面をみるとくエラー 通信が切断されました。のテロップが流れていた。二人のキャラクターの姿は消え、黒い画面に赤い文字のテロップ。

「いち……！？」

――――トンッ

ん？

何か右肩が重い……。

「あらら」

中島がちぐの方に顔を見て微笑を浮かべた。

右側の方に視線を向けると、ちぐが眠ってしまった。

俺の肩に寄り掛かりながら、寝息をたてている。

「いち、寝ちゃった……」

「部活きつかったんだよ。俺らもそろそろ上がるか」

時計は七時四十分を指している。

「佐山あ。まさか、いちをこのまま床に寝かせるなんて訳無いよなあ？」
あ？」

「え？」

「いち、俺にべったり寄り掛かっているから俺が立ち上がればそのまま倒れてしまうだろう。」「んな訳ねえよなあ？」

中島がニヤニヤしながら俺を見ている。

「じゃあどうすりゃいいんだよ！？」

「そりゃあ……」

「何だよ！」

「んー……。お姫様抱っこでベッドに寝かしてあげれば？」

「ばっ！馬鹿！！」

ちぐが触れている部分から体がほてって、赤く染まるのが自分でも分かった。

「ええ？んじゃ、俺は先に退室します！外で待ってるから！」

そう言い残して、手をヒラヒラと振りながら部屋を出ていつてしまった。

二人きりになった部屋には、ちぐの寝息だけが響いていた。

「ちぐ……ちぐ？」

呼び掛けて、頬を指でつついても、起きない。

……どうしよう。お姫様抱っこ？

どうやるんだよ、それ。

自分の手の平を見ると、真っ赤になって小刻みに震えていた。

中島じゃあるまいし、何を考えてんだよ……。

ただベッドに乗せてやればいいだけだし。

けど、やっぱり緊張した。

俺だって思春期真っ盛りの男子。

密室に二人きりで、相手は超無防備。

すぐ後ろにはベッドがある……こんな、こんな。

ああ！もう！！

何だよ、俺。

絶対おかしい。

こんなことをちぐに対して考えてる自分が嫌になる……。

「おし」

意を決してちぐの膝に右手を入れて、左肩を背中に回した。

案外軽くて、すぐに持ち上げられた。

胸の当たりに、ちぐの寝息が当たって温かくなって、いつそう恥ずかしくなった。

シャンプーの臭いがしていて、小さく柔らかい体の感覚が俺の全身を温めた。

すぐにベッドに乗せてしまえばいいのに、ずっとこうしていたいと思った。

この柔らかい体を包み込んで、ずっと、ずっといられたら・・・。
ちぐを激しく求めてしまう自分が、いた。

自分でもなんだか、悲しい気持ちになって、ちぐんそつとベッドにおろす。

俺は、ちぐの事・・・何にも知らねえんだな・・・。

小学生の時から、男友達みたいに想っていた。
けど、違う。

俺よりでかくて。

でも、今は違う。

誰とも仲が良いようで、何かをしまっていて。

けど、俺が何を知ってる？自分の目の前で眠っているちぐという、

一人の人が愛しくなった。

同じくらい、不安になった。

好き・・・そんな二文字で表していい感情じゃなかった。

俺はちぐに布団をかけて、部屋を後にした。

。 気付いてしまったこの気持ち、整理することができなかった・・・。

21話

五月下旬――――。

俺は今何をしているかというところ。。。。。「ああ！どうしよう！何着てこうかな、やっぱりTシャツ系のほうがいいよね？ねえ、大輝どう？」

そう、姉貴に振り回されている。

「別にどうでもよくね？ちぐからは絶対見えねえだろ」

「うるさい！別にいいでしょ！てか、あんたもちぐが投げの初めで見るとしょ？他にもあんたの友達出てるんだから気合い入れな！」

はあ。。。。。

姉貴が試合に出るみたいだ。

何故こんな事になっているかというところ――。

昨日の事だ。

●○○●○○●

「ねえ大輝」

「ん？」

休み時間が始まると、ちぐが声を掛けてきた。

表情はいたって冷静を装っているが、明らかにそわそわしている。

「落ち着けて、何だ？」「慌ててた？」

「うん」

ちぐが、小さく深呼吸をしてから話を切り出した。

「明日の土曜日、大会あるんだ。決勝。

席とるからさ、良い席。

見に……こない？」

「決勝……？」

ああ、なんか前姉貴に話したことあったな。
明日だったんだ。

「いいの？」

「うん！」

「姉貴もいいか？」

「いいよ。二個とつとくよ」

よっしゃ！！

心の中で万歳をした。

「戸崎くんもでるし、三組からは秋野くんと飯島くんもでるから」

「ふうん。どこと当たんの？」

「中東」

「チュウトウかぁ。強いよな、あそこ。水泳部も強かった」

中東でくなくひがし>とよむのだが、皆チュウトウと呼んでいる。

「絶対勝つから。応援してね」

「任せとけて！俺、お前の試合初めてだから楽しみだな」

「頑張る」

ガッツポーズを作って見せた。

「一ノ瀬え！！」

教室の前から坊主の男子がちぐの名前を呼んだ。

ちぐが手招きすると、こつちに歩いてきた。

「席とつといたぜ？一応三つ」

「おつ、ありがとう」

「えと、この人が佐山くん？」

「うん。大輝、こいつは緑川緋汰。キャッチャーなんだ。席取り頼んどいたんだ」

「ありがとう。俺はさや」

「あ、知ってるぜ？佐山大輝くん。水泳部のエースでイケメン、だろ？」

「何で知ってんの・・・？イケメンとかエースはわかんないけど」
「そりゃあ、一ノ瀬が毎回毎回・・・」

「わあわあ！緋汰、ありがとね！本当ありがと」
「なんだ？」

「照れなくても」

「黙れ！」

ちぐは、教室を出ていってしまった。

「あらら、まいっか」

「うん・・・？緑川って長いから緋汰でいい？」

「おう。俺は佐山でいいか」

「ああ。えと、席ありがとう」

「そうだった！これ、場所と時間と座席表。」

田園応援席の一番前」

「了解」

キャッチャーか・・・。

野球の事は分からないから何とも言えないけど、ピッチャーと気が合わないと出来ねえんだろな。

「あのさ」

「何？」

「ちぐ、強いんだよね？」「めっちゃ強い」

「即答！？だつて一応女子だろ？」

「佐山は一ノ瀬の試合見たこと無いから言っただよ。ほとんどあいつの球打った奴いねえぞ」

そんなに？

「けどな・・・」

そこまで言つて緋汰が黙る。

「けど？」

緋汰が躊躇いがちに口を開いた。

「あいつに俺が言つたつて言っつなよ？先生と俺しか知らねえからな」
俺が知らない事・・・。

「言わない」

「……実はな、一ノ瀬。

怪我してんだよ、肩を。」

本当は投げるのキツイはずなんだけど。

やめろつつつてもきかねえ。

それに、あいつがいたほうがいいし……。」

肩の怪我。

ニュースでプロの選手が肩を壊したというのは、いくつか知っている。

ちぐも、それ？

「んじゃ、明日よろしく。一ノ瀬が無理しそうだったら教えてくれないよ。」

佐山、仲いいんだろ……。」緋汰もちぐの事を本気で心配しているのだろう。

それでいて、勝ちたい。

自分の中で、キャッチャーとして悩んでるのかな、と思った。

●○○●○○●●

大丈夫かな。

ちぐ……。

緋汰も、ちぐも、野球部員皆。

今なにしてんのかな……。とぼんやり考えながら姉貴に付き合ってた。

21話(後書き)

- 野球部レギュラー●

背番号1 I c h i

一ノ瀬 千雲イチノセ チグモ
(三ー三)

2 H i t a

緑川 緋汰ミドリカワ ヒタ
(三ー四)

3 O w a d a

大和田 俊才オワダ シュン
(三ー一)

4 K e i g o

南野 恵悟ミナミノ ケイゴ
(三ー一)

5 S a K o

左 吉 広 介 サ コ コ ウ ス ケ
(二一 二)

6 A s h i t a b a

明 日 葉 宙 ア シ タ バ ソ ラ
(二一 一)

7 A k i n o

秋 野 希 代 介 ア キ ノ キ ヨ ス ケ
(三一 三)

8 K a t a h i r a

片 平 華 飛 太 カ タ ヒ ラ カ ヒ タ
(二一 五)

9 T o z a k i

戸崎 小太郎トザキ コタロウ
(三十三)

10 K o m o r i

古森 礼コモリ レイ
(三十三)

11 I s i z a k i

石崎 利一イシザキ リイチ
(三十四)

12 S a t o

佐藤 研一郎サトウ ケンイチロウ
(三十五)

13 I - z i m a

飯島 剛イイジマ ツヨシ
(三ー三)

14 Kazama

風間 湊力ザマ ミナト
(二ー一)

15 Tokita

常田 正夫トキタ マサオ
(二ー三)

●登場人物●

照岡 和テルオカ カズ
O型
テニス部

田中 清士郎タナカ セイシロウ
A型
サッカー部

22話

――――大会当日。

会場の中東中学の応援席と田園中学の応援席は学校の応援団や教員や家族でいっぱいになっている。

田園中も、ほとんどの部活が今日のために休み、応援にまわっている。

季節外れの大会とはいえ、女子のエースピッチャーの一ノ瀬はかなり有名だったし、相手も中東中と部活に力を入れている中学だったので、地元の人達も田園側と中東側に別れて座っている。

田園中はロッカールームで顧問の小島先生の話聞いていた。

「よし。決勝だ、しまっていけ。相手も中東だから気を抜くなよ！以上！あとは緑川に任せる」

小島先生はこの試合、緑川のキャプテンシーに任せるつもりで最初からいたのだった。

ただ、

「一ノ瀬」

「はい」

「肩の調子・・・」

「大丈夫です」

「そ、そうか」

「何かありましたか？」

肩の調子を聞こうと思っていただけだったが、即答だったため、話題を変えた。「中東とは久しぶりの試合だな。田中は随分力をつけたっていう噂だからな、しまっていけよ」

「はいっ」

田中 理。中東中のピッチャーだ。

一ノ瀬と対戦する前までは、エースで、誰にも打たれない自信があった、打たれても決して得点には繋げさせなかった。

――が、一ノ瀬と当たったときに自分より速く、コントロールも上手い一ノ瀬の球を打ち返せずに鼻を折られた。その後、打倒一ノ瀬を志に練習してきたのだという。

一ノ瀬は、大島 高也という、サードの選手にも注意したほうが良いと思っていた。

守備の間を上手く抜けさせるヒットを放つ。

もし、打たれたら勢いがなくても場合によっては、得点を取られてしまうかもしれない。

「先生」

「なんだ？」

「サードにも、注意ですよ」

そう言つて、一ノ瀬も緋汰の所へと向かった。

会場が徐々に埋まり、満席とまではいかないが、会場がいっぱいになった。

選手の入場を今か今かと、待っている。

一般客のほとんどの客が、一ノ瀬を見てみたいという好奇心で会場に足を運んでいた。

一ノ瀬がいくら上手くても、高校に行っても甲子園には、出場できない。

一ノ瀬の強さを知る人達は残念で仕方が無いというように、試合に来る度、試合前は複雑な表情をする。

中東中学側の応援席は、かなり盛り上がっていた。

よほど田園中学に因縁があるのか、挑発的にも思える態度をとる輩もちらほらといた。

大輝は、応援席で姉と並んでグラウンドを凝視していた。

野球の事に関して、疎いこの姉弟からすると、ルールもあやふやでただ、ちぐが勝てるか、怪我が悪化しないか、心配していた。

「なんか凄いいねえ。結構良い席だよね、ここ。緑川君に感謝しなきゃ」

「ああ」

「どうしたの？さっきから。悩んじゃってる顔して」

「大丈夫」

「そう？てか、あたし野球のルールいまいちわかんないや」

「ちぐが言うには、打ったら触られないように走ればいいらしいよ？」

「うわっ！それ絶対、ルールの一割も話してないと思う」

「ですよねえ・・・」

「けどさ！なんとなく分かればいいよね！テレビとかでも凄いのは分かるしさ！千雲の試合、始めてみるし」

「だよな」

姉貴は、本当にちぐが好きなんだな、かわいいんだな、と思った。

『ただいまより・・・中東中学校対、田園中学校の試合を始めます。選手の皆さんはグラウンドに整列してください・・・』

女性の声のアナウンスがかかり、大きな電工掲示板に選手の名前とスコア表が映し出された。「中東とは久しぶりの試合だな。田中は随分力をつけたっていう噂だからな、しまっていけよ」

「はいっ」

田中 理。中東中のピッチャーだ。

一ノ瀬と対戦する前までは、エースで、誰にも打たれない自信があつて、打たれても決して得点には繋げさせなかった。

・・・が、一ノ瀬と当たったときに自分より速く、コントロールも上手い一ノ瀬の球を打ち返せずに鼻を折られた。

その後、打倒一ノ瀬を志に練習してきたのだという。

一ノ瀬は、大島 高也という、サードの選手にも注意したほうが良いと思っていた。

守備の間を上手く抜けさせるヒットを放つ。

もし、打たれたら勢いがなくても場合によっては、得点を取られてしまうかもしれない。

「先生」

「なんだ？」

「サードにも、注意ですよ」

そう言つて、一ノ瀬も緋汰の所へと向かった。

会場が徐々に埋まり、満席とまではいかないが、会場がいっぱいになった。

選手の入場を今か今かと、待っている。

一般客のほとんどの客が、一ノ瀬を見てみたいという好奇心で会場に足を運んでいた。

一ノ瀬がいくら上手くても、高校に行つても甲子園には、出場できない。

一ノ瀬の強さを知る人達は残念で仕方が無いというように、試合に来る度、試合前は複雑な表情をする。

中東中学側の応援席は、かなり盛り上がっていた。

よほど田園中学に因縁があるのか、挑発的にも思える態度をとる輩もちらほらといた。

大輝は、応援席で姉と並んでグラウンドを凝視していた。

野球の事に関して、疎いこの姉弟からすると、ルールもあやふやでただ、ちぐが勝てるか、怪我が悪化しないか、心配していた。

「なんか凄いな。結構良い席だね、ここ。緑川君に感謝しなきゃ」

「ああ」

「どうしたの？さっきから。悩んじゃってる顔して」

「大丈夫」

「そう？てか、あたし野球のルールいまいちわかんないや」

「ちぐが言うには、打ったら触られないように走ればいいらしいよ？」

「うわっ！それ絶対、ルールの一割も話してないと思う」

「ですよえ・・・」

「けどさ！なんとなく分かればいいよね！テレビとかでも凄いのは

分かるしさ！千雲の試合、始めてみるし」

「だよな」

姉貴は、本当にちぐが好きなんだな、かわいいんだな、と思った。

『ただいまより――中東中学校対、田園中学校の試合を始めます。選手の皆さんはグラウンドに整列してください――』

女性の声のアナウンスがかかり、大きな電工掲示板に選手の名前とスコア表が映し出された。

会場には、今までの試合で敗れた学校も集まっていることに、大輝は今になって気がついた。

『もう一番繰り返します、選手の皆さんはグラウンドに整列してください――』

アナウンスが二度、繰り返されると、向かい合った両ベンチから選手が駆け足でグラウンド中央に集まった。

東側は田園ベンチ。

田園のユニフォームは白地に黒と黒に近い赤の二本のラインが、ズボンの腰から足首にかけて、上半身はボタンの両側と袖に入っている。

胸に、アルファベットで<TAZONO>の黒い刺繍。

背番号一から十五までが、中央に集まった。

中東中学のユニフォームは、白地に細い紺色のストライプが入った上下。

オレンジ色で、胸に

<中東>の文字が刺繍されている。

田園は、背番号の上に印された名前がローマ字で自由なのに対して、中東はオレンジ色の漢字で、全て苗字で統一されているのが見えた。中央に並んだ両チームのうち、田園の列の先頭は緑川。次に一ノ瀬が続く形で並んでいた。

「お願いしまっす！！！」

野球帽を脱いで、一斉に礼をしてベンチに走って行く選手達を見届けると、応援合戦が始まった。

『田園中学校の先攻。二番キャッチャー、緑川君……』

緑川がバッターボックスに立った。

女性のアナウンスが聞こえなくなるくらいの大音量で応援が盛り上がる。

「かつ飛ばせーっ！！緑川！押っせー押せ！！押せ！！緑川！」

緋汰がバッターボックスで構えた。

中東の田中が、投げた。

「ストライク！」

初球を見送った。

初球はど真ん中ストレート。

速さも、一ノ瀬と比べれば比にはならない速さだった。

二投目、振りかぶって……投げた。

外角を突くストレート。

速さはなくとも、重さがある球を緋汰の遠距離型バットが快い金属音を立てて打ち返した。

「行けーえっ！！！」

田園ベンチから聞こえてきた声援を合図に緋汰がバットを投げ捨てて走り出した。

マウンドの上で、いきなり良い当たりをされてしまった田中が呆然と球を目で追っている。

緋汰が打ち返した打球は、バックボードに跳ね返り二塁に送球された。

二塁で待ち構えていた選手がタッチする前ギリギリで緋汰がスライディングをした。

「セーフ！セーフ！」

審判が手を横に広げた。

ベンチと田園の応援席から歓声が湧く。

「ナイスバッティン！緑川ー！！！」

いきなり二塁打を放たれた中東ね顧問は、顎を抱えて俯いた。

『一番ピッチャー、一ノ瀬君……』

女性のアナウンスは、一ノ瀬さんではなく、君でアナウンスされた。一ノ瀬がバッターボックスに向かうと、両応援席からヤジと声援がとんだ。

相手校の、一ノ瀬を知らない者、特にうるさそうな母親達。は、一ノ瀬が女ということ、完全になめてかかっている。

「一ノ瀬せんぱーいっ！ かつ飛ばせーええっ！！」

ベンチ入りできない一年生が張り裂けんばかりの声で応援した。大輝の胸が高く脈打つ。手は汗でぐっしよりだった。

マウンドに立つ田中の目は緊張と最高の相手を目の前にした興奮で光り輝いていた。

勢いよく、田中が一投目を放った。

一ノ瀬はバントの姿勢をとった。

「ストライク！」

しかし、一ノ瀬のバットはボールを打たない。

二投目。

また、一ノ瀬はバントの姿勢だった。

守備も前進してきた。

「ストライク！」

二投目もストライク。

田中の目には自信の色が宿り、応援席は静かになってしまった。

ラストチャンス、三投目。

緋汰が、右手で顔をパタパタと仰いだ。

一ノ瀬は右手で額の汗を拭って、バッターボックスに立った。

「――――緋汰からのサインだ。」

田中が全力で投げた球は、やや内角で真っすぐに飛んできた。

すると、バント姿勢だった一ノ瀬はいきなりバント姿勢から直り、バットを振った。

キンッ！！！！

緋汰がスタートする。金属音が響いて、打球が地を這うように物凄いスピードで……ショートグローブに……収まった。

と、思いきや、勢いに堪えられなかったグローブは弾き飛ばされて予期せぬ方向に球が転がった。

・・・これまた、回転がかかっていて、物凄い速さで。

ショートは手が痛かったのか、右手をおさえて立ち尽くしている。慌てて他のポジションがボールを追う。

緋汰は余裕でホームインした。

一ノ瀬は持ち前の駿足で一塁、二塁と、混乱する守備の中を抜けていく。

やっと、球を掴んだ選手が二塁に送球。

一ノ瀬がスライディングをして滑り込む――。

と、

「ああっ!？」

二塁の選手がまさかの、エラー。

ブチ切れる中東の顧問。

大喜びの田園ベンチ。

一ノ瀬はすぐさま立ち上がり、三塁に向かった。

三塁を蹴つても、球はまだ飛んて来ない。

ベンチを見ると、仲間達が思いつきり腕を振り回して「回れ!！」と叫んでいた。

一ノ瀬は意を決して、ホームに向かって走る。

グラウンドが歓声に包まれて、会場全体が興奮に包まれても、一ノ瀬は冷静さを失わなかった。

あと少しでホームインの所で、球がキャッチャーの手の中に収まっていた。

応援席からは、女性の悲鳴。中東ベンチからは歓喜の声。田園ベンチからは雄叫び。

後はタッチされるだけ……。

そう、誰もが思った。

しかし、一ノ瀬は全力疾走をやめない。

ホームのキャッチャーに突っ込むように走る。

キャッチャーが、タッチしようと、グローブを伸ばす……。すると、一ノ瀬はタッチされる寸前で、深く、そして素早く、屈伸して、跳ね上がった。

キャッチャーの視界からターゲットが、消えた。

一ノ瀬がキャッチャーの頭上を美しく跳躍……。

そのまま手を出して、ホームベースにタッチしながらグラウンドに俯せになった。

一ノ瀬が審判を睨む。

「セーフ!!セエエーフツ!!!」

審判の顔も紅潮している。

一気に沸き立つ会場。

呆然と一ノ瀬を見つめる中東ナイン。

「キャーッ!!」

里美も大輝に抱き着く。

大輝も諸手を上げて喜んだ。

「っしやあああつ!!」

一ノ瀬が叫びながらベンチに走り寄り、仲間とハイタッチを交わしたり、頭を揉みくちやにされている。

田園中、一回の攻撃のうち、二人で二点追加。

一人一点稼いだ計算になるハイペースなスタートを切った。

田園中のエース、一ノ瀬の魅力的なプレイと幸運、キャプテンの緑川との連携……。

たまらず、中東中の顧問はタイムアウトを要求した。

23話

「遠田あー！ テメエなにをやっているんだ！」

「すみません・・・」

エラーをしたショートの手選に、中東野球部の顧問、安盛が怒鳴りつけた。

「アマの打球が、捕れねえのか！ 遠田！」

初っ端がまされてんじゃねえぞ！！」

安盛の容赦無い罵声とも叱責ともつかない声が遠田にぶつけられた。

「それと、田中ああ！」

「はい」

「いきなりヒットの打ち放題じゃねえか。しかも何だ？ あのアマには借りがあんじゃねえのか？ え？」

様子見はいいから本気でいけよ、ゴラア」

「すみませんっした」

中東中学の安盛は、試合になると口が悪くなることで有名だ。

そのせいで、

ドナルド（怒鳴るど）というあだ名がついた。

中東中学近隣の中学では、ドナルドで通じる。

生徒からの人気は最悪に限りなく近いが、何故か父兄からの人気がある。

「しまつてけよ。三年になったばかりで調子乗る時期かしんねーが、テメエの代わりなんざいくらでもいんだからな？ 田中よお」

「はい」

「・・・行つてこい」

「はい！！」

田中は、グラウンドに戻る途中で遠田に「気にするなよ」と声をかけておいた。

確かに、初っ端この流れはまずい。

しかし、原因は自分だ。

一ノ瀬や緋汰の強さは、充分知っていたはずなのに、様子見なんかにしたのは愚策だった。

田園中のベンチは盛り上がり、一ノ瀬が揉みくちにされているのが見えた。

とりあえず、一回は二点に抑えたい。

攻守が交代しても、一ノ瀬から点をとるのは楽じゃないはずだ。

『四番、セカンド――――南野君』

細身で小柄な少年がバッターボックスに立った。

一投目。

田中が振りかぶって投げる。

「お？」

田園ベンチの奥に座っていた小島が小さく声を出した。

「ストライク！」

速さは普通だが、コントロールがいいストレート。明らかにさっきとは違った。

南野は空振りだった。

二投目。

今度は、スピードのある内角を突いてきたストレート。

田中は、特にコントロールを磨いたようだ。

もともと、中学生で変化球がいくつも操れる中学生などほとんどいないはずだ。

一ノ瀬は、特例――――

いわゆる、天才。

なのだろう。

女子というハンディキャップをカバーするための練習姿勢や圧倒的なセンスは、例え女子でも天才としか言いようが無い。

それを分かっている、田中は一ノ瀬に勝ちたかった。

努力すれば――――勝てる。

信じて、ドナルドの厳しい練習にも堪えた。

久しぶりに一ノ瀬を前にして、いきなり点を取られたので目が覚めた。

今度こそ、討ち取る。

「ストライク！」

二投目も決まった。

南野は、田中の気迫に押されて、なかなか球をとらえることができずにいた。

三投目もストライク。

田園中のカウントにアウトが一つたされた。

「どんまい！南野、きにすんな！！」

ベンチにうなだれて戻ってきた南野に、チームメイトが優しく、手荒に慰める。

「まだ、一回。焦んなよ、大丈夫だから」

一ノ瀬も声をかけた。

『三番、ファースト……大和田君』

「行っけー！行け行け！大和田！！」

応援席から声援が沸いた。

大和田はチームのムードメーカー。

チームのふいんきをよくしてくれるし、笑わせてくれる。

三年三組の、照岡のような存在だ。

「大和田いつきまーす！」

バッターボックスに立つなりそう叫んだ。

「おう！いけよお！」

会場がざわめく。

一投目、田中が投げる。

キン！！！！

田中のバットが球をとらえた。

さして飛ばなかったが、ギリギリで一塁に進出した。

逃しかけた流れを、少し引き戻した。

「大和田！ナイス」

ベンチのふいんきも、戻りかけた。田中だけが努力してきたのではない。

田園中の選手も相当努力してきた。

そして、中東の選手も。

『五番、サード――――左古君』

二年生生になったばかりの左古がギクシャクしながらグラウンドに出た。

「左古！楽にいけー！」

緋汰が叫ぶ。

「はいっ！」

一投目。

左古のバントが成功した。

――――と思われたが。

田中がバントを読んで、前進していた。

すぐに球を拾い、二塁に送球。

「アウト！」

大和田が滑り込むのが少し遅かった。

しかし、それだけでは中東は終わらない。

一塁に向かっていた左古が一塁を踏む前に、送球した。

「アウト！」

ダブルプレーだ。

「アウト！チェンジ！」

中東と田園の攻守が交代した。

「すみませんでした」

左古が先輩達に謝った。

「左古。気にするな」

先輩がこたえるまえに、顧問の小島が答えた。

「一回で二点、いいペースだ。コールドゲームになるより、うちのエースの見せ場がなきゃつまんねえ」

大和田が左古の肩を叩いて言った。

「かましたれ！一ノ瀬」

「当たり前だ」

一ノ瀬も、左古の肩に手を置いてマウンドに向かった。小島と緋汰、そして大輝は、マウンドに上がる一ノ瀬に不安げな視線を向けていた。

大輝はその反面、一ノ瀬のピッチングに期待していた。

「ほら！千雲だ！キャーッ、頑張れ千雲！！」

里美は一ノ瀬がマウンドに立つと、大輝の腕をバシバシ叩きながら応援した。

『中東中学の攻撃です。』

一番、ピッチャー……田中君』

田中がバッターボックスに立ち、構えた。

田中がニヤリと笑うと、一ノ瀬も口の端を上げた。

一投目。

男子顔負けのフォームで、投げた。

内角、ギリギリのストレート。

「ファール！」

ギン、と、鈍い音をたてて打たれた球は、後ろにとんだ。

「痛て……」

速くて、重みのある内角のストレートを無理して打ったことで、田中が手首をプラプラと振った。

マウンドの上で、一ノ瀬が笑みを浮かべる。

肩は本調子じゃないものの、田中が自分の球を打ち返してくれている事が嬉しかった。

どうせ試合をするなら、ピンチだってなきゃつまらない。

二投目。

物凄い角度で落ちる、フォーク。

直角のように落ちるフォークは、一ノ瀬の武器でもあった。しかも、スピードが半端づばない。

「ストライク！」

田中は空振り。

三投目にかかるとき、もう一ノ瀬の顔から感情は消えていた。一ノ瀬も、手を抜かないつもりでいく。

肩の事があるにしても、自分のできる範囲で、全力でいく。

三投目。

キーン！！

快い音をたてて、田中のバットが球をとらえた。

「いけーっ！！」

中東のベンチがわきたった。

――――が。

「アウト！」

田中が打ったはずのボールはバウンドせずに、真っ直ぐ一ノ瀬のグローブの中に飛んで行き、グローブにおさまった。

「・・・！」

何が起こったか分からないというような顔で一ノ瀬を睨みながら、田中がベンチに戻った。

24話

「くそつ。どうなってんだよ!!」

田中はベンチに戻ると、拳をベンチにたたき付けた。

「おい。落ち着けて」

サードの大島が落ち着かせようと声をかけた。

「ちゃんと芯にあてたんだぜ!?一ノ瀬にしちゃあ珍しいスローボールだったから、余裕で打ったはずなんだよ・・・」

二投目に一ノ瀬が投げた球は、田中が言う通り、一ノ瀬にしては珍しいスローボールだった。

剛速球や、変化球を操る一ノ瀬らしくない、スピードが無いど真ん中のストレート。

まるで素人のような球。

「ふうん・・・スローボールねえ・・・」

大島が黙り込む。

大島は、チームの中でも冷静で頭がキレる。

キャプテンである田中を支える、中東中学の一ノ瀬的な存在だった。田中は緋汰と比べると冷静さに欠けるが、一ノ瀬や田園中学に勝利することへの執念がドナルドに見込まれて、キャプテンになった。田中に足りない所は、大島がカバーするといった感じた。

『二番、キャッチャー……谷垣君』

大柄な、選手がバッターボックスに立った。

いかにも、パワーがある選手といった感じた。

一投目。

外角のカーブ。

一ノ瀬のカーブは、バットが届かないあたりを大きくカーブしてギリギリの外角を突く。

打ちにくい球だ。

「ストライク!」

そのうえ、スピードもあるとくる。

二投目、三投目も、谷垣はバットに球を掠らせることすらできず、アウトになった。

一回で、田園中は二点を奪い、中東はすでにツアアウト。

一ノ瀬のピッチングは心を折る。

二番の谷垣も、一ノ瀬を睨みつけながらバッターボックスからおりた。

一ノ瀬は表情に微塵の変化も見せず、ただ谷垣の視線を受けた。

『五番、サード……大島君』

「打て！大島！」

ドナルドがバッターボックスに立つ大島に叫ぶ。

大島の表情は、冷静そのものだった。

大島は、一ノ瀬のピッチングを分析すれつもりでいた。

特に、あの一ノ瀬の手に戻っていったスローボール。

一投目。

「ファール！」

ストレートの剛速球。

なんとか当てたが、手が痺れる。

二投目。

内角を突くストレート。

キン！！

大島のバットが球をとらえて打ち返した。

「いけーっ！」

中東のベンチと応援席がわいた。

「戸崎！！！」

一ノ瀬が叫ぶ。

「っしや！！！」

ライトに飛んでいった球に素早く戸崎がミートして一塁に送球。球を拾ってから、投げるまでのモーションに無駄がなく速い。

「アウト！！！」

大島を刺すことができた。

「チェンジー!!」

電光掲示板の中東のパネルにゼロの文字が付け足された。
ベンチに戻るとき、緋汰が一ノ瀬に駆け寄った。

「お前、やっぱり肩が」

「うるさい」

「無理すんなよ!引退戦のほうが大事だろ!?こんなところで潰れんなよ!!」

大島相手にストレートだけなんておかしい。

一ノ瀬なら変化球でも使うか、もっと打ちにくい球を選ぶはずだった。

しかし、いくらサインを出しても一ノ瀬は左手で額を脱ぐだけだった。

「楽しいんだ」

「・・・っ」

不敵な笑みを浮かべて、中東が守備につく様子を見る一ノ瀬は、怖くもあつた。

肩の痛みは決して取れた訳でも無く、痛いはずであつて。

試合を楽しむ余裕なんてないはずで・・・。

「緋汰、大丈夫だから。それに、痛い時は新しい球投げる」

「は?」

新しい・・・?

一ノ瀬、変化球を開発できんのかよ・・・?

「あつ!!さっきの田中に投げた!!」

「ふつ。田中、久しぶりだったから投げちゃったんだ」

「あの球・・・」

「ま、皆に頼ることになるけどね」

頼る・・・?

『二番、キャッチャー……緑川君』

緋汰は、話を途中で切り上げてバッテリーボックスに向かわなければ

ならなくなった。

一ノ瀬も「頑張れよ」と声をかけてベンチに戻った。

マウンドの上で、田中が目をギラつかせていた。

一投目。

「ストライク!!」

空振りだった。

一ノ瀬までとはいかないが、落ち度があるフォークだった。

「田中・・・変化球投げれるようになったんだ?」

キャッチャーの谷垣が答える。

「ああ。」

けどな、俺お前を尊敬するぜ?おれだったらあいつの球捕れねえし、あの変化球についてけねえ」

「そりゃ、どうも」

マウンドで、田中が紅潮した顔で笑った。

24話（後書き）

中東ベンチ紹介

顧問

ドナルド
安盛

1 田中 理タナカ サトシ

2 谷垣 由宇太タニガキ ユウタ

3 会原 颯太アイハラ ソウタ

4 高橋 豊タカハシ ユタカ

5 大島 高也オオシマ コウヤ

6 遠田 菜亜トウダ サイア

7 水谷 茂ミズタニ シゲル

8 節 秋紬セツ ウィンチュウ

9 中山 蓮ナカヤマ レン

10 森永 英介モリナガ エイスケ

1 1 百部 頼太モモベ ライタ

1 2 日下部 月斗クサカベ ツキト

1 3 瀬ノ田 世流セノタ セル

1 4 富沢 正太郎トミザワ ショウタロウ

1 5 新谷 まさきシンタニ マサキ

瀬ノ田、富沢、新谷以外は三年生

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6631n/>

君のいる空

2010年10月26日14時56分発行